

志木市の文化財第13集

志 木 市 遺 跡 群

I

1989

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山太藏

このたび、昭和62年度の志木市遺跡群発掘調査の成果を報告書として刊行することができたことを喜ばしく思います。

志木市は武蔵野台地の東端に位置し、遺跡は市域を流れる柳瀬川・新河岸川の二河川の右岸台地上に集中して存在しています。また、近年では荒川低地の自然堤防上でも馬場遺跡のように台地下での遺跡の存在が知られるようになってきました。

しかしながら、現況では急激な都市化の波が本市にも例外なく押し寄せているのが実情であります。

そのため、志木市では市内の埋蔵文化財を保護・保存すべく、同時に専用住宅建設者などの負担軽減を図るため、昨年度より国庫及び県費補助を得て、調査を進めております。そして、昨年度の本事業は確認調査・発掘調査を併せ、15カ所をかぞえ、多大な成果をあげたものと信じております。

今後も、地域開発に伴う工事などが盛んに行われることとなりましょう。しかし、その土地には我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産である文化財が眠っていることを念頭に入れ、それを保護・保存する上での具体的な対策を講じていくことが急務であろうと考えております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、文化庁・埼玉県教育委員会ならびに地元の多くの方々のご指導に深く感謝するとともに、本書が郷土の歴史研究のために広く活用されて頂ければ幸いに存じます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する志木市遺跡群の昭和 62 年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、志木市教育委員会が主体者となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、昭和 62 年 4 月 1 日より昭和 63 年 3 月 31 日まで実施した。
3. 本書の作成は志木市教育委員会が行い、編集は尾形則敏が行った。また、執筆は下記のように分担した。

第 1・3・5 章 佐々木保俊 第 2・4 章 尾形則敏

4. 挿図版の作成は執筆者が行ったが、土器実測作成には内野美津江・金野照子・深井恵子の協力を得た。
5. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水糸レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代末葉～古墳時代初頭住居跡 H = 古墳時代 住居跡 D = 土抗

U = 埋甕 M = 溝跡

6. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会

教 育 長 金子庄三（～昭和 63 年 6 月）

秋山太藏（昭和 63 年 7 月～）

事務局次長 齊藤昭吉（～昭和 63 年 3 月）

大西 弘（昭和 63 年 4 月～）

社会教育課長 白砂正明

社会教育係長 山中政市

社会教育課 下河辺信行・佐々木保俊・岩崎香代子（～昭和 63 年 3 月）・尾形則敏

前川美香（昭和 63 年 4 月～）

発掘担当者 佐々木保俊・尾形則敏

7. 各遺跡の発掘調査及び整理事業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏にご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局指導部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・志木市史編さん室・志木市立志木第三小学校

会田 明・浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・飯田充晴・梅沢太久夫・小出輝雄・肥沼正和

笹森健一・斯波 治・高橋 敦・坪田幹男・中島岐視生・並木 隆・根本 靖・松本富雄

8. 発掘調査及び整理事業参加者

発掘協力員

内野美津江・鹿沼美智子・小庄まゆみ・小俣暁子・金野照子・佐藤小夜子・田中鎮庫
高田輝子・中村浩一郎・深井恵子・宮本田ず子・村井京子・山科美智

整理協力員

内野美津江・鹿沼美智子・小庄まゆみ・金野照子・深井恵子・宮本田ず子・村井京子

目 次

はじめに	1
例 言	2
目 次	3
図版目次	4
挿図目次	5
第 1 章 昭和 62 年度調査成果の概要	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査成果の概要	3
第 2 章 城山遺跡第 4 地点の調査	4
第 1 節 遺跡の概要	4
第 2 節 縄文時代の遺構と遺物	5
第 3 節 弥生時代の遺構と遺物	6
第 4 節 古墳時代の遺構と遺物	8
第 5 節 歴史時代の遺構と遺物	12
第 6 節 まとめ	15
第 3 章 中野遺跡第 6 a ・ 6 b 地点の調査	18
第 1 節 遺跡の概要	18
第 2 節 検出された遺構と遺物	19
第 4 章 中道遺跡第 6 地点の調査	21
第 1 節 遺跡の概要	21
第 2 節 歴史時代の遺構と遺物	22
第 5 章 西原大塚遺跡第 6 地点の調査	23
第 1 節 遺跡の概要	23
第 2 節 弥生時代の遺構と遺物	24

図 版 目 次

図版 1	城山遺跡第 4 地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版 2	”	(上) 縄文時代 1 号埋甕 (下) 弥生時代 2 号住居跡
図版 3	”	(上) 古墳時代 65 号住居跡 (下) 65 号住居跡遺物出土状態
図版 4	”	(上) 49 号土坑 (下) 49 号土坑主体部の工具痕
図版 5	”	(上) 51 号土坑 (下) 52 号土坑
図版 6	”	縄文時代 1 号埋甕埋設土器、弥生時代 1 号住居跡出土遺物 古墳時代 65 号住居跡出土遺物
図版 7	”	49・51 号土坑出土遺物
図版 8	”	52 号土坑出土遺物
図版 9	中野遺跡第 6 a・6 b 地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版 10	”	(上) 2 号溝跡 (下) 1 号土坑・2 号溝跡出土遺物
図版 11	中道遺跡第 6 地点	(上) 24 号土坑 (下) 24 号土坑出土遺物
図版 12	西原大塚遺跡第 6 地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版 13	”	(上) 10 号住居跡 (下) 10 号住居跡遺物出土状態
図版 14	”	10 号住居跡出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	市内の地形と調査地点 (1 / 30000)	2
第 2 図	周辺の地形と調査地点 (1 / 5000)	4
第 3 図	遺構分布図 (1 / 300)	5
第 4 図	1 号埋甕 (1 / 30)	5
第 5 図	1 号埋甕埋設土器 (1 / 4)	5
第 6 図	1 号住居跡、50 号土坑 (1 / 60)	6
第 7 図	1 号住居跡出土遺物 (1 / 4)	6
第 8 図	2 号住居跡 (1 / 60)	7
第 9 図	2 号住居跡出土遺物 (1 / 3)	8
第 10 図	65 号住居跡 (1 / 60)	9
第 11 図	65 号住居跡出土遺物 1 (1 / 4)	10
第 12 図	65 号住居跡出土遺物 2 (1 / 4)	11
第 13 図	49 号土坑 (1 / 60)	12
第 14 図	51・52 号土坑 (1 / 60)	13

第15図	51号土坑出土遺物(1/4)	14
第16図	52号土坑出土遺物(1/4)	14
第17図	周辺の地形と調査地点(1/5000)	18
第18図	遺構分布図(1/300)	19
第19図	1号土坑(1/60)	19
第20図	2号溝跡(1/60)	20
第21図	1号土坑・2号溝跡出土遺物(1/3)	20
第22図	周辺の地形と調査地点(1/5000)	21
第23図	遺構分布図(1/300)	22
第24図	24号土坑(1/60)	22
第25図	周辺の地形と調査地点(1/5000)	23
第26図	遺構分布図(1/300)	24
第27図	10号住居跡(1/60)	24
第28図	10号住居跡出土遺物1(1/4)	25
第29図	10号住居跡出土遺物2(1/3)	25

第1章 昭和62年度調査成果の概要

第1節 調査に至る経過

志木市は埼玉県の南東部に位置し、その地形は大略、北東部には荒川（旧入間川）の形成した沖積地が広がり、南西部は武蔵野台地、西部は柳瀬川によって開析された低地となる。そして、市域の埋蔵文化財包蔵地は主に台地縁辺部に分布している。

ところで、当市は首都圏へ25 km以内という距離にあるため、昭和40年前後から人口増加が激しく、急速にベッドタウン化してきた。現在、この現象は以前程ではないが、それでも市域の開発行為の多くは住宅建設が占めている。このような開発行為は当然のこととして埋蔵文化財包蔵地にもおよび、これを保護・保存してゆくことは文化財行政の上で重要な課題となっているが、これに対しては主に記録保存の措置を取ることによって対処している。

さて、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模なものが多いが、その中で開発当事者が個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施には、費用の負担など困難な点が多々あった。そのため、昭和62年度からは国・県よりの補助金の交付を受け、これに対応してゆくことにした。なお、昭和62年度は確認調査も含めて以下に示した15地点の調査を実施した。

番号	遺跡名	所在地	面積 (㎡)
1	氷川前遺跡 第2地点	志木市柏町4丁目 2709・2706-6	733.97
2	西原大塚遺跡第5地点	幸町4丁目 3-32	150.00
3	中道遺跡 第3地点	柏町5丁目 2920-1	448.00
4	中道遺跡 第4地点	柏町5丁目 2950-54	95.00
5	中道遺跡 第5地点	柏町5丁目 2919-2	157.40
6	城山遺跡 第4地点	柏町3丁目 2620-15	98.28
7	中野遺跡 第5地点	柏町2丁目 1526-1・1528-3	429.42
8	中野遺跡 第6a地点	柏町2丁目 1209-6	100.15
9	中野遺跡 第6b地点	柏町2丁目 1209-7・1209-8	235.56
10	中道遺跡 第6地点	柏町5丁目 2986-3	115.94
11	富士前遺跡 第2地点	本町3丁目 1857-6	90.11
12	西原大塚遺跡第6地点	幸町3丁目 3133-18	64.31
13	西原大塚遺跡第7地点	幸町3丁目 3133-5	77.44
14	中道遺跡 第7地点	柏町5丁目 2913-1	869.25
15	西原大塚遺跡第8地点	幸町3丁目 3122	1,227.00

(第1図の番号と一致)



第1図 市内の地形と調査地点 (1 / 30000)

第 2 節 調査成果の概要

1. ひかわまえ 氷川前遺跡第 2 地点 試掘調査。
2. にしほらおおつか 西原大塚遺跡第 5 地点 遺構・遺物の検出はなかった。62 委保記第 2 - 2234。
3. なかみち 中道遺跡第 3 地点 遺構・遺物の検出はなかった。62 委保記第 2 - 2581。
4. 中道遺跡第 4 地点 遺構・遺物の検出はなかった。62 委保記第 2 - 2580。
5. 中道遺跡第 5 地点 試掘調査。
6. しろやま 城山遺跡第 4 地点 後述。62 委保記第 2 - 2770。
7. なかの 中野遺跡第 5 地点 試掘調査。
8. 中野遺跡第 6 a 地点 後述。62 委保記第 2 - 3669。
9. 中野遺跡第 6 b 地点 後述。62 委保記第 2 - 3670。
10. 中道遺跡第 6 地点 後述。63 委保記第 2 - 86。
11. ふじまえ 富士前遺跡第 2 地点 試掘調査。
12. 西原大塚遺跡第 6 地点 後述。63 委保記第 2 - 1644。
13. 西原大塚遺跡第 7 地点 試掘調査。
14. 中道遺跡第 7 地点 試掘調査。
15. 西原大塚遺跡第 8 地点 発掘調査が 63 年度に継続して行われたため、63 年度の発掘調査報告書に掲載する。

第2章 城山遺跡第4地点の調査

第1節 遺跡の概要

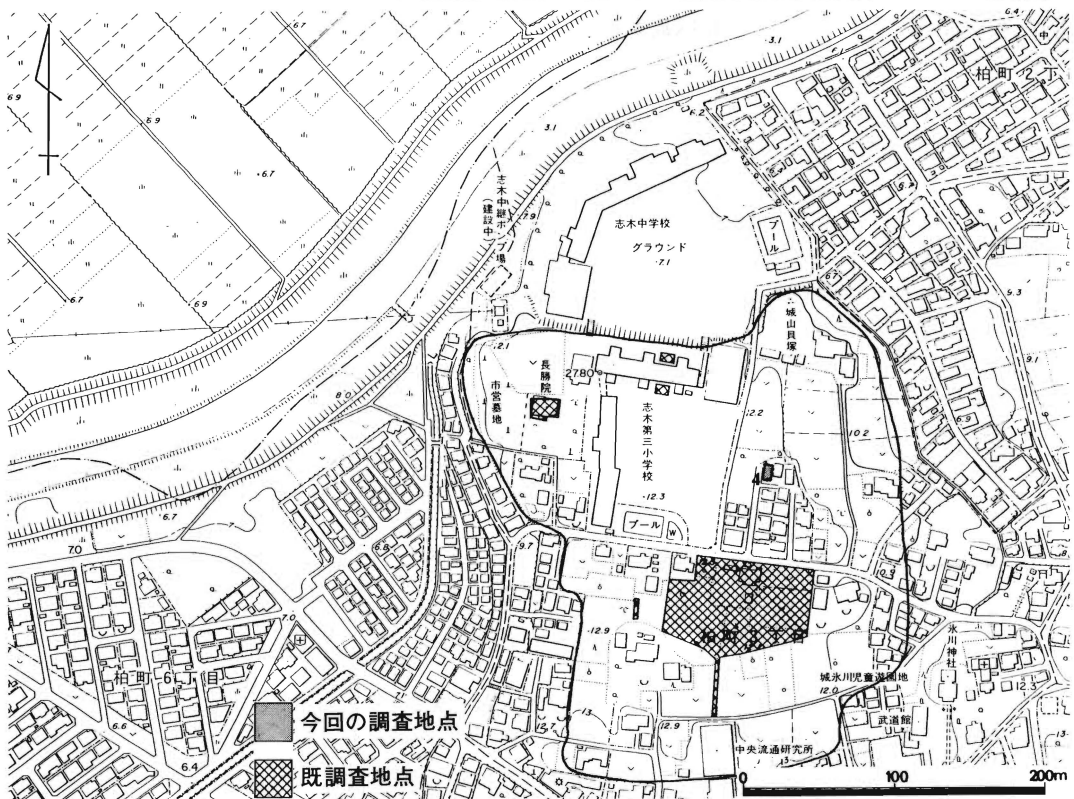
(1) 立地と環境

城山遺跡は、北東流する柳瀬川に開析された低地を北西に臨む台地上にあり、標高は約12m、低地との比高差約5mを測る。遺跡の現況は宅地化が進んでいるが、台地縁辺や台地のやや奥まった所には部分的に畑地を残している。

本遺跡は、第1回目の発掘調査が昭和49年に実施され、以後の調査で縄文時代前期の集落跡・貝塚、弥生時代後期、古墳時代前・後期、平安時代の集落跡、中世の城館跡を含む複合遺跡であることが知られている。又、昭和60年の発掘調査で古墳時代前期の住居跡1軒、後期52軒、平安時代の住居跡7軒、さらに「柏の城」大堀に関連する溝跡、中・近世の土坑・井戸跡が検出された（志木市史編さん室 1984・1986、佐々木 1987、佐々木・尾形 1988）。

(2) 発掘調査の経過

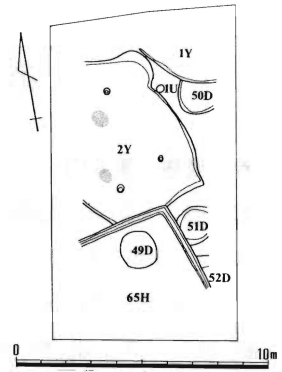
発掘調査は、昭和62年6月19日から開始した。バックホーを使用し、表土を剥ぎながら遺構確



第2図 周辺の地形と調査地点 (1 / 5000)

認作業を行ったが、予想通りに調査区全面に遺構がびっしりと重複して検出された。そのため、21日からは遺構の切り合い関係により土層観察ベルトを設定し、遺構の精査を開始した。その結果、縄文時代中期の埋甕1基、弥生時代末葉～古墳時代初頭の住居跡2軒、古墳時代後期の住居後1軒、平安時代の土坑2基、中世の地下式墳1基が狭い面積内に集中して検出された。

6月25日には遺構の写真撮影・実測を行い、7月1日には重機により埋戻しを完了、調査を終了した。



第3図 遺構分布図 (1/300)

第2節 縄文時代の遺構と遺物

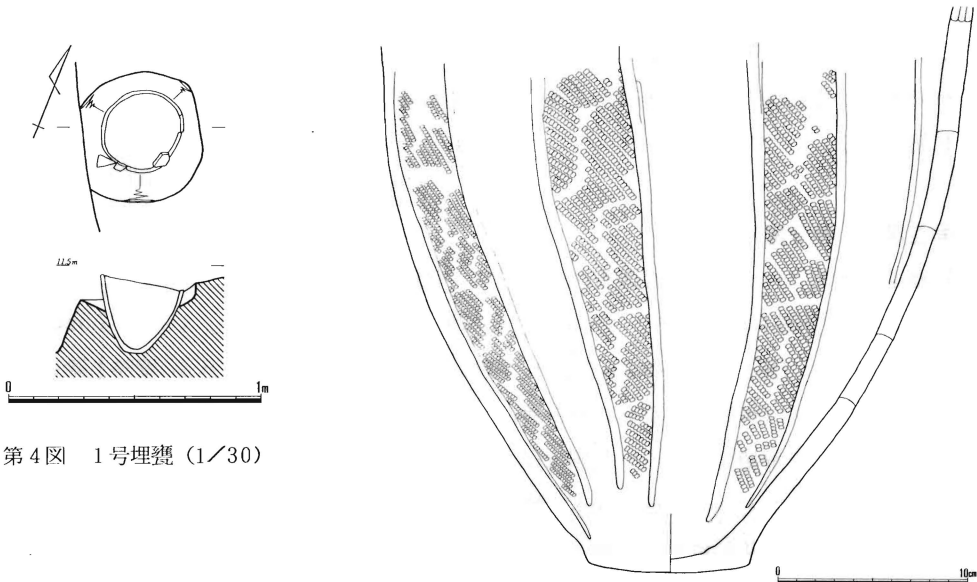
1号埋甕 (第4図)

〔構造〕掘り込みは径50cm程の不整形円形を呈しており、断面は深さ8cmまで浅い皿状を呈しているが、以下は土器の器形にほとんど一致する。土器は深鉢形土器が正置の状態で見つかった。

〔時期〕加曾利E II～E III式期。

1号埋甕埋設土器 (第5図)

胴部上半以上を欠損する深鉢形土器である。文様は地文に単節LRの斜縄文を施した後、2本一組の沈線を9単位垂下させ、その沈線間内のみ縄文を残し、残りの部分は磨消している。



第4図 1号埋甕 (1/30)

第5図 1号埋甕埋設土器 (1/4)

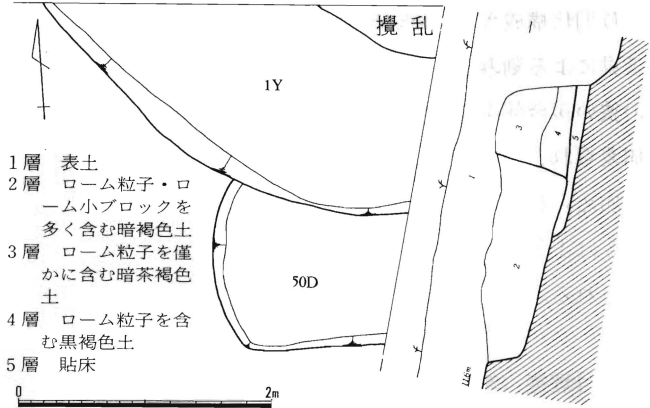
第3節 弥生時代の遺構と遺物

1号住居跡（第6図）

〔住居構造〕大部分が調査区外にあり、南側は50号土坑に切られ、詳細は不明である。（壁高）遺存状態の良い所で47cmを測る。（床面）確認できる範囲ではよく踏み固められていた。（覆土）ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から壺形土器が倒置した状態で出土した。

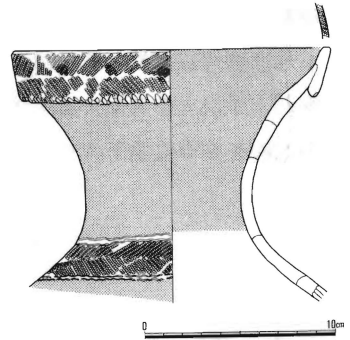
〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。



第6図 1号住居跡、50号土坑（1/60）

1号住居跡出土遺物（第7図）

胸部上半以下を欠損する壺形土器である。複合口縁を呈する口縁部には単節斜縄文が2段施され羽状構成される。口唇部にも単節斜縄文を施している。又、口縁部には円形赤彩文がほぼ等間隔に14口あるいは15口配され、下端には刻みを加えられる。肩部には上下2条の「S」字状結節文で区画された中に単節斜縄文が2段施され、羽状構成される。内外面はともによく磨かれており、口縁部内面は横方向、頸部内外面は縦方向、肩部文様帯下は横方向に細密な磨きが施される。肩部内面以下は横方向にヘラナデ。赤彩は内面が頸部以上、外面が文様部を除いた全面に施される。



第7図 1号住居跡出土遺物（1/4）

2号住居跡（第8図）

〔住居構造〕北西コーナー付近は調査区外にあり、北東コーナーは攪乱を受けている。南西コーナー付近は65号住居跡に切られる。（平面形）長方形であろうか。（規模）4.96×6.60m。（長軸方位）N-28°-W。（壁高）30～52cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。（床面）壁際を除いてよく踏み固められている。（炉）焼土が2カ所で検出されたが、北側のものは西側のものよりやや規模が大きく、焼土も厚く堆積している。北側は径60cmの円形、西側は40×52cmの楕円形を呈する。

（柱穴）3本検出されたが、主柱穴4本で構成されると思われる。深さは62～87cmを測る。（覆土）ローム粒子を含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

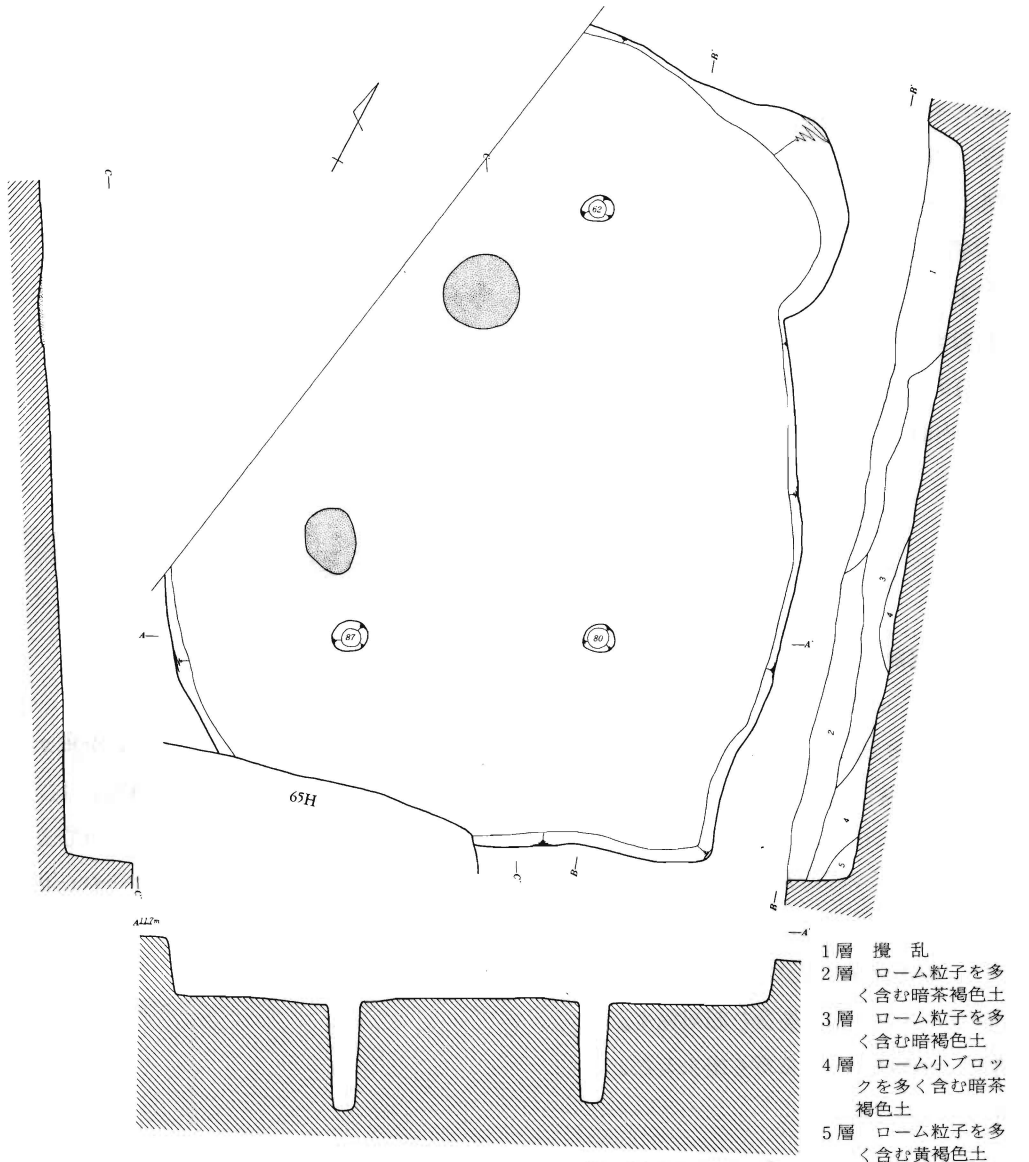
2号住居跡出土遺物 (第9図)

壺形土器 (1~6)

1~4は口縁部、5・6は肩部付近の小破片である。

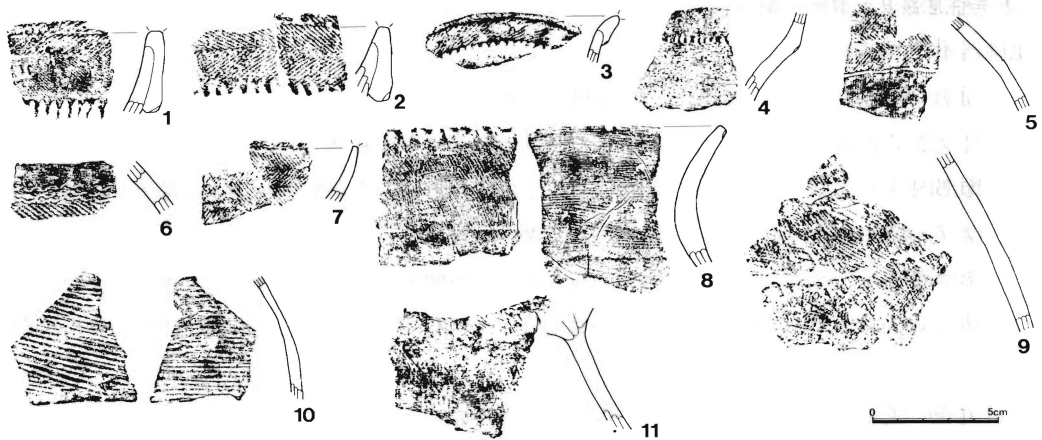
1・2は複合口縁を呈し、文様は口唇部と外面複合部に単節斜縄文を施し、外面複合部は2段により羽状構成される。2の外面複合部には上下2段に円形赤彩文が配される。口縁部下端はハケ状工具による刻みが加えられる。内面は横方向に磨きが施され、2は赤彩される。3は1・2より幅の狭い複合部をもつ土器で、外面口唇部と複合部には単節斜縄文が施される。口縁部下端は刻みが加えられ、内面はナデ、頸部は磨きが施される。4は口縁部が屈曲し直立する。屈曲部分には刻みが加えられ、内面は磨きが施される。

5は1条の沈線上方に単節斜縄文を4段施し羽状構成をとる。外面文様部下及び内面は磨き後赤彩される。6は3条の「S」字状結節文下に単節斜縄文が1段みられる。内面はナデ、外面文様部



第8図 2号住居跡 (1/60)

0 2m



第9図 2号住居跡出土遺物 (1/3)

上方は横方向の磨き後赤彩される。

鉢形土器 (7)

小型のものである。口唇部と外面口縁部に単節斜縄文を施し、外面口縁部は4段により羽状構成される。外面には円形赤彩文が1つ付される。内面横ナデ後、縦方向に磨きが施される。

甕形土器 (8~11)

台付甕形土器の小破片と思われる。8は口縁部、9・10は胴部上半、11は脚台部付近。

8は外面口唇部が工具による押捺が加えられる。調整は幅1.5cm程のハケ目が内面には横方向、外面には縦方向に施される。

9・10は外面に斜方向、10は内面に横方向のハケ目調整が施される。9の内面はヘラナデ。

11は内面ヘラナデ、外面ハケ目調整が施される。

第4節 古墳時代の遺構と遺物

65号住居跡 (第10図)

〔住居構造〕 49・51・52号土坑に切られる。大部分が調査区外にあるため詳細は不明である。(壁高) 60cm前後を測り、壁は垂直に近い状態で立ち上がる。(壁溝) 確認できる範囲では全周する。上幅25cm・下幅15cm・深さ10cm前後を測る。(床面) 壁際を除いてよく踏み固められている。(カマド) 5層中に粘土粒子を含むことからカマドは西壁に構築されている可能性が強い。(覆土) 1層-表土。2層-ローム粒子・焼土粒子を多く、炭化物粒子を含む暗茶褐色土。3層-ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土。4層-ローム粒子を多く、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土。5層-ローム粒子を多く、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗褐色土。

〔遺物〕 西側床面上から多く出土した。

〔時期〕 鬼高式期。

65号住居跡出土遺物（第11・12図）

土師器坏形土器（1～8）

1は頸部に稜をもち、口縁部は大きく外反しながら僅かに内反する。口頸部内外面は横ナデ、以下外面はナデ、内面はヘラナデされる。赤彩は内面が底部を除いて、外面は口頸部に施される。覆土中の出土で、1/3程の遺存度。

2は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段を有し、口縁部は大きく外反する。内面口唇部は横ナデにより僅かな稜を作出している。口頸部内外面横ナデ、以下外面はナデ、内面はヘラナデされる。内面及び外面口頸部付近は赤彩される。西側床面上の出土で、完形である。

3は底部から体部にかけて半球状を呈し、口縁部は短く外反する。口縁部内外面横ナデ、以下外面は磨き、内面はヘラナデ後、軽いナデが施される。赤彩は外面が底部を除いて、内面は全面に施される。西側北壁寄りの床面上の出土で、完形である。

4・5は相似た器形の土器である。丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な段を有し、口頸部は外傾する。内面口唇部直下には1条の沈線が巡る。内外面口頸部付近横ナデ、以下外面はヘラ削り後ナデ、内面はヘラナデされる。4は西側床面上の出土、5は北壁寄りの床面上から口縁部を下にした状態で出土した。ともに完形である。

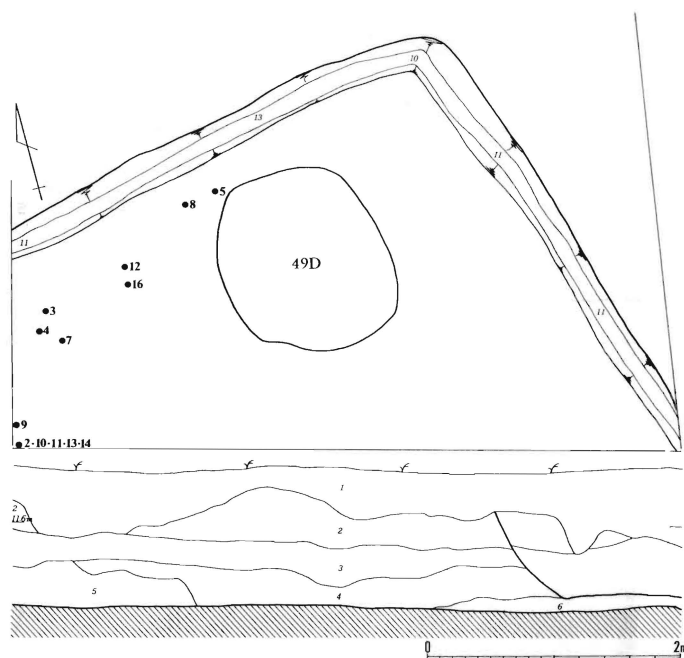
6は頸部の他に口縁部途中にも1条の明瞭な稜を有する土器である。口頸部内外面ハケ状工具による横ナデか。以下外面は磨き、内面はヘラナデされる。覆土中の出土で、1/3程遺存する。

7は丸底の底部から立ち上がり、頸部に明瞭な段を有し、口頸部は外傾する。内面口唇部は鋭く面取りがまわり、内外面黒色処理が施されている。内面底部には放射状に暗文が施される。口頸部内外面横ナデ、以下外面はヘラ状工具により磨き（的）が施され光沢をおびる。内面はナデ。西側北壁寄りの床面上の出土で、完形である。

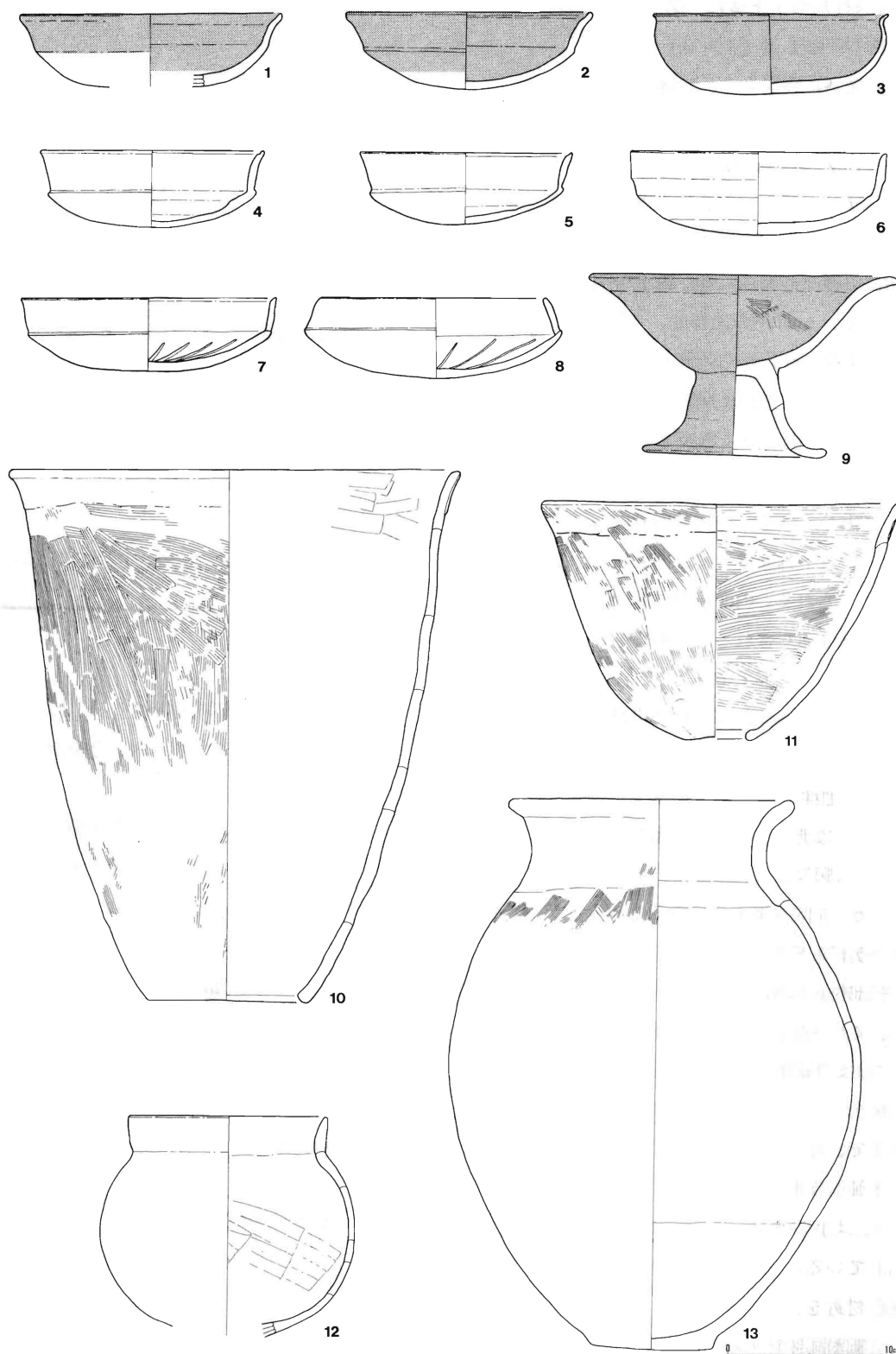
8は丸底の底部から立ち上がり、頸部に明瞭な段を有し、口頸部は内傾する。色調・調整及び内面底部に暗文が施されるなど7に酷似する。北壁寄りの床面上から口縁部を下にした状態で出土。完形である。

土師器高坏形土器（9）

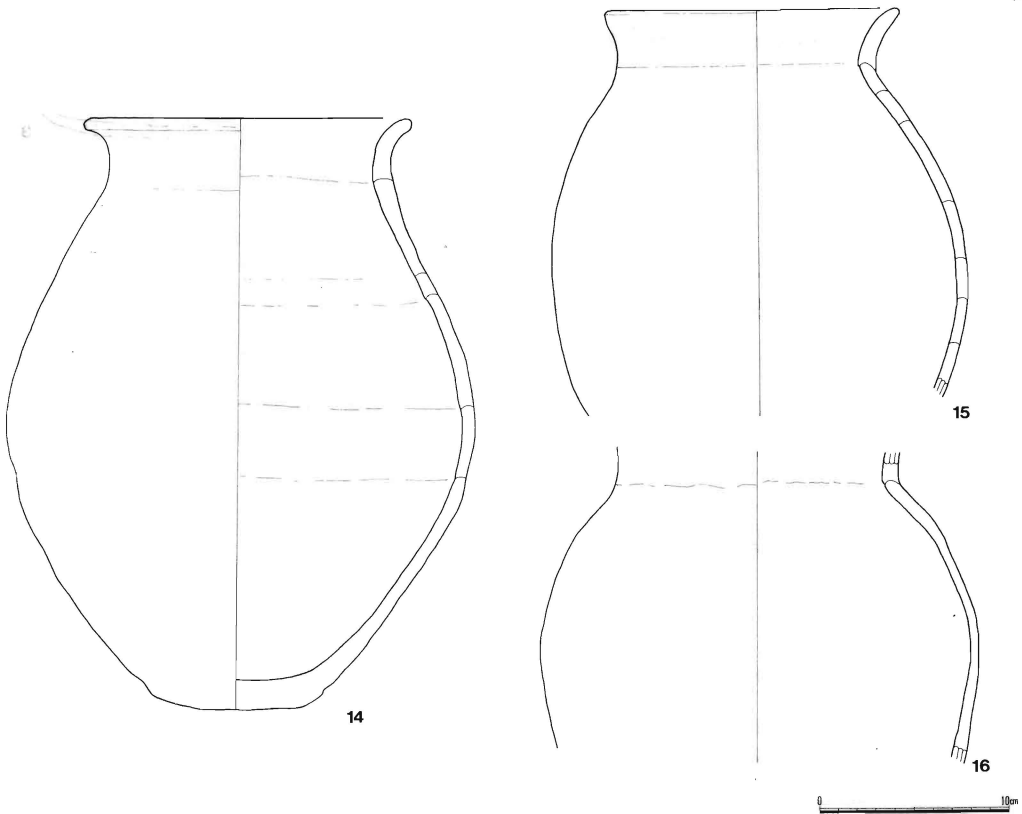
坏部は口頸部がゆるやかに大きく外反し、脚柱部が太身で短く、裾部が外反し水平にのびる。坏



第10図 65号住居跡（1/60）



第11图 65号住居跡出土遺物1(1/4)



第12図 65号住居跡出土遺物2 (1/4)

部は口頸部内外面横ナデ、以下内外面ナデられるが、ハケ目痕が僅かに残る。脚台部は裾部内外面横ナデ、脚柱部はナデられ、外面と口頸部内面は赤彩される。西側床面上の出土で、完形である。

土師器甕形土器 (10・11)

10は長胴で、口縁部から底部にかけてゆるやかにすぼまる。口縁部は口縁部下端にのみ粘土帯を貼付け、同時に輪積痕の利用により複合口縁を作出している。底部は筒抜け状を呈する。外面は全面ハケ目調整がされるが、胴部下半は縦方向に密な磨き(的)が施されハケ目を消している。内面口縁部付近は横方向のヘラナデ、以下はていねいに磨きが施され光沢をおびる。西側床面上の出土で、4/5程遺存する。

11は口縁部に最大径をもち、底部に向かって直線的にすぼまる。口縁部は10と同様の手法を用い複合口縁を作出している。底部に単孔を穿つ。内外面ハケ目痕が顕著にみられる。西側床面上の出土で、4/5以上遺存する。

土師器甕形土器 (12～16)

12は小型甕か。球状の胴部と直立ぎみの口頸部をもつ。口頸部内外面は横ナデされ、ハケ目痕を消している。以下外面は斜方向の磨き(的)、内面はヘラナデされる。北壁寄りの床面上の出土で、底部付近を欠損する。

13は胴部中位に最大径をもち、上半部で内傾し頸部でくびれ、口頸部は外反する。口縁部は複合口縁を呈する。遺存状態が悪く、外面器表は剥落がひどいが、口頸部は横ナデ、胴部上半は細密な

縦方向のハケ目調整が施される。内面は口頸部横ナデ、以下ヘラナデされる。西側床面上の出土で、4/5程遺存する。

14は胴部中位よりやや下に最大径をもち、胴部から頸部への移行はスムーズである。口頸部内外面横ナデ、以下外面は縦方向に棒状のような工具で磨き（的）、内面はヘラナデされる。西側床面上の出土で、4/5以上遺存する。

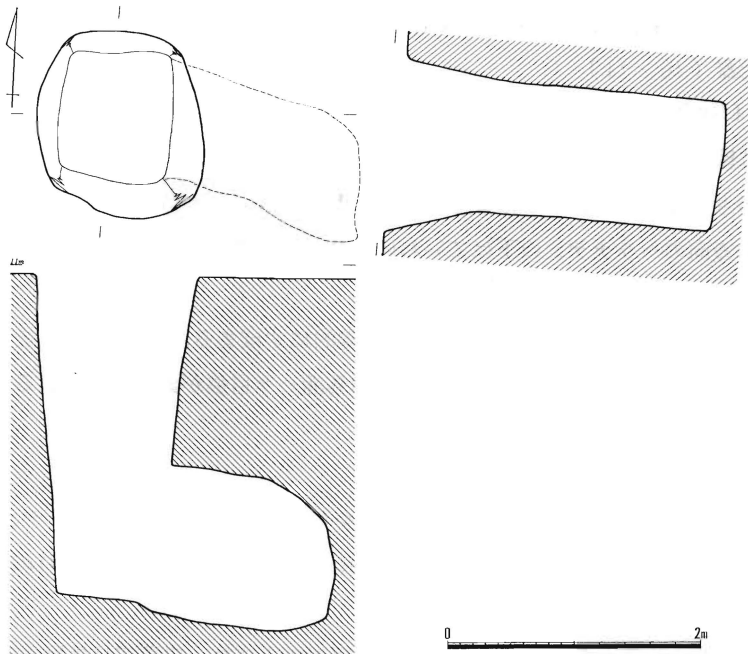
15は胴部下半を欠損する。胴部中位に最大径をもち、頸部でくびれ、口頸部は外反する。口頸部内外面横ナデ、以下外面は磨き（的）、内面はヘラナデされる。覆土中の出土である。

16は口頸部と胴部下半を欠損する。胴部上半に最大径をもつものか。頸部内外面は横ナデされるが、外面においてはその後、棒状具（幅2mm程）により1～3cm間隔で縦方向に調整（？）がまわる。以下外面は斜方向に磨き（的）、内面はヘラナデされる。北壁寄りの床面上の出土である。

第5節 歴史時代の遺構と遺物

49号土坑（第13図）

〔構造〕地下式墳で、65号住居跡を切る。（入口竪坑部）開口部は130×150cmの不整形形で、底面はほぼ平坦で90×104cmの長方形を呈する。確認面からの深さは260cmを測る。（主体部）平面形は84×160cmの長方形を呈し、主軸方位に対し縦長の形態をとる。底面は中央付近でやや窪んでおり、竪坑部底面から最深16cm下がっている。天井部までの高さは120cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。（覆土）上層はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。下層はローム粒子・



第13図 49号土坑（1/60）

ローム小ブロックを含む暗褐色土を基調とする。なお、主体部内の覆土は天井部まで充満しておらず、空洞の状態であった。(工具痕)奥壁において顕著に観察することができた。工具痕は刃部の幅が15～20cm程で鋭く切られたような平坦面を残すことから鋤状の工具で作業を行ったものと想定できる。又、工具痕から観察して壁上方では工具を上→下、下方では右→左の向きで力を加えたものと考えられる。

〔遺物〕陶器片・獣骨(犬の頭骸骨?)が出土した。

〔所見〕覆土の堆積状態が不整合を呈し、覆土中にローム粒子・ローム小ブロックを多く含むことから人為的な埋め戻しが想定できる。同時に主体部の不整な平面形態から推測して、本地下式墳は完成をみないままに埋め戻されたものと考えられる。

49号土坑出土遺物(図版7-1～3)

1～3は常滑甕の胴部破片である。14～15世紀頃のものであろう。

51号土坑(第14図)

〔構造〕東側は調査区外にあり、西側で65号住居跡を切る。(平面形)楕円形と思われる。(規模)不明×142cm。(深さ)76cm。(長軸方位)N-84°-W。坑底は平坦で、壁は80°の角度をもって急斜に立ち上がる。(覆土)1層-表土。2層-ローム粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土。5層-灰を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む灰褐色土。6層-ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む黄褐色土。7層-ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・灰を含む暗褐色土。

〔遺物〕覆土中から多く出土した。

〔時期〕国分式期。

51号土坑出土遺物(第15図、図版7-4～13)

灰釉陶器(第15図1・2)

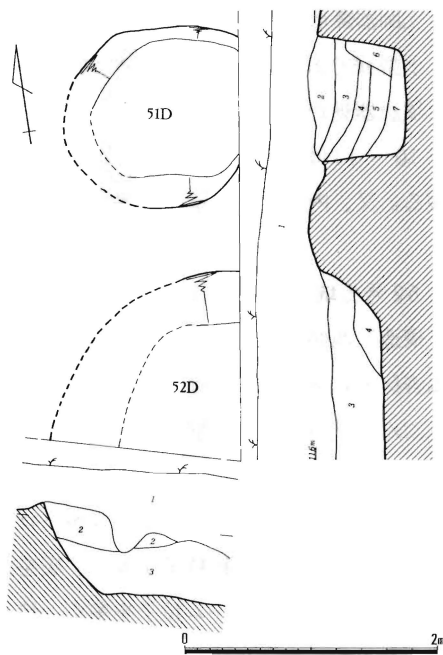
碗形土器である。両者とも内面に釉をかけ、高台は付高台である。1の外面には重ね焼きの痕跡がみられる。1は1/2程遺存し、2はほぼ完形である。

須恵器碗・坏・皿形土器(第15図3～7)

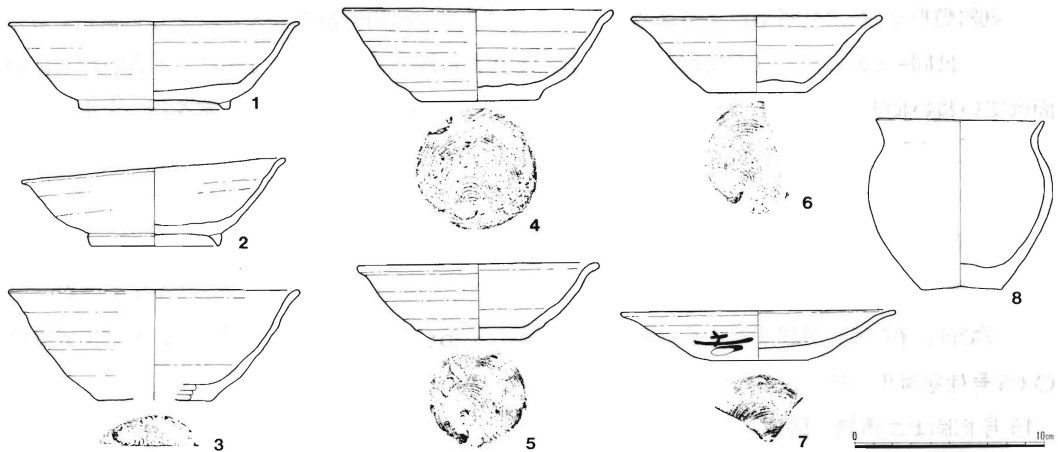
3は体部が僅かに内湾しながら開き、口縁部は外反する。焼成は良好で青灰色を呈する。底部には回転糸切り痕を残し、1/3程遺存する。

4は体部が内湾しながら開き、口縁部は外反する。焼成は良好で灰白色を呈し、胎土には小石を多く含む。底部には回転糸切り痕を残す。ほぼ完形である。

5～7は酸化焰で焼かれた須恵器坏・皿である。5・6は相似た土器で口縁部がやや強く外反する。ともに底部には回転糸切り痕を残し、1/2程の遺存度。7は「吉」という字が墨書されている。



第14図 51・52号土坑(1/60)



第15図 51号土坑出土遺物 (1/4)

底部には回転糸切り痕を残し、1/3程遺存する。

土師器甕形土器 (第15図 8)

小型甕である。平底で最大径は胴部上半にもつ。内外面ロクロ水挽き痕を残す。4/5程の遺存度。

須恵器甕形土器 (図版7-10・11)

10・11は同一個体である。内外面ともに再調整されているが、外面においては平行叩き目痕が残る。又、内面には窯壁の一部と思われる付着物が観察される。

52号土坑 (第14図)

〔構造〕西側で65号住居跡を切るが、大部分が調査区外にあり、詳細は不明である。坑底はいくぶん凹凸を有する。壁は60°の角度をもって立ち上がる。(覆土)2層-ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗褐色土。3層-ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く、灰を含む暗茶褐色土。4層-ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土。

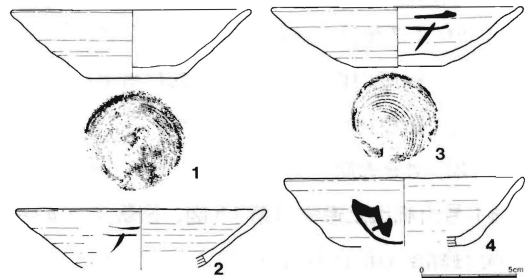
〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔所見〕大部分が調査区外で、又西側が65号住居跡の覆土中に掘り込まれているため、本土坑は僅かな壁の立ち上がりと土層断面によって確認された。こうした状況と調査の不備もあって、全容は不明なものとなってしまった。

52号土坑出土遺物 (第16図、図版8)

須恵器坏形土器 (第16図)

すべて酸化焰で焼かれた須恵器坏で、平底の底部から口縁部にかけて直線的に開く。1・3の底部には回転糸切り痕を残し、2～4は墨書された土器である。1はほぼ完形。3は1/3程の遺存度。2・4は小破片である。



第16図 52号土坑出土遺物 (1/4)

須恵器甕形土器（図版 8 - 3 ~ 5）

3・4は同一個体であるが、壺形土器かもしれない。内外面ロクロ水挽き痕がみられる。5の外
面はていねいに再調整が施されている。

第6節 ま と め

ここでは、65号住居跡、51・52号土坑出土土器について若干触れることにする。

○65号住居跡出土遺物（第11・12図）

出土土器はすべて土師器で、各器種間にみるバラエティーが実に豊富である。

坏形土器（1～8）

註1

1・2は頸部に段（1はやや弱い）を有し、口縁部が大きく外反する赤彩土器である。市内で
は本遺跡33・47H出土土器に類例をみるが、量的には少ない。

3は口縁部が「S」字状で、底部から体部にかけて半球状を呈する赤彩土器である。市内では中
野遺跡第2地点3号住居跡-6、本遺跡12H-3に類例があり、いわゆる「比企型坏」の祖源にあ
たる土器と考えられる。埼玉県富士見市打越遺跡、朝霞市大瀬戸東遺跡など周辺遺跡でも比較的よ
くみられる。

4・5はいわゆる「須恵器模倣坏」で、従来から鬼高式期のメルクマールとされる有段坏である。
その特徴をあげてみると、

- ① 内面口唇部直下に1条の沈線がまわる。
- ② 口頸部が外傾する。
- ③ 有段の作り出しが明瞭である。
- ④ 調整はていねいである。

註2

であり、これは埼玉県児玉町後張遺跡におけるVIb期と同様の特徴を備えている。市内では本遺跡
54H-11に類例がみられるが、量的には多くない。

註3

6は頸部の他に口縁部途中にも1条の明瞭な稜を有する土器で、市内では本遺跡8H-2がその
特徴を若干備えていようか。

7は口頸部が直線的に外傾する大型有段坏である。その特徴をあげてみると、

- ① 内面口唇部に鋭い面取りが施される。
- ② 内面底部に放射状の暗文が施される。
- ③ 調整は非常にていねいで、外面底部は磨き（的）が施される。
- ④ 内外面ともに黒色処理（以下、黒彩と呼ぶ）が施される。

註4

であり、市内での類例に本遺跡23H-2・3がある。

註5

8は口頸部が直線的に内傾する大型有段坏で、7の特徴②～④を備えている。7・8の類例には
群馬県群馬町三ツ寺I遺跡、神奈川県横須賀市鉞切遺跡出土土器などがある。

高坏形土器（9）

市内では完形の出土はないため全形を知り得る貴重な資料と言える。坏部は底部から頸部にかけてゆるやかに内湾しながら開き、口頸部が外反し、脚台部は脚柱部が太身で短く、裾部が外反し水平にのびる。本遺跡 22H-6 は坏部のみ残存するが、本例の特徴を備えている。

甔形土器（10・11）

10 は類例として本遺跡 54H-18 をあげることができるが、複合口縁がやや崩れている点や外面にハケ目痕を顕著に残す点など若干異なる。

11 は本遺跡 12H-9 によく似ており、小破片では同一個体と思えるほどである。

甕形土器（12～16）

12 は小型の球胴甕で、本遺跡にも 22H-5、34H-6 など散見できるが、いずれも口縁部が外反するもので、本例のように直立するものではない。

13～16 は胴部に脹みを有するが、長胴の土器で、口縁部形態・胴部最大径位置などにバラエティーがみられる。

以上、65号住居跡出土土器については、本住居跡が全掘できなかったことを前提としてではあるが、概して本城山遺跡Ⅱ期の特徴を備えているものである。しかし、坏形土器でⅢ期に一括した大型有段坏が本例のようにⅡ期の特徴をもつ、いわゆる「比企型坏」（3）、「鬼高型坏」（4・5）と共伴することはなかった。さらに、大型有段坏でも1・2と7・8のように赤彩土器、黒彩土器の同一存在が明確になり、この段階ですでに外来的要素をもつ土器群によって構成されていたことがわかる。よって、本住居跡出土土器は当地域の古墳時代後期の特色ひいては旧武蔵国の歴史的動向を探る上で重要な資料となりうるであろう。

○ 51・52号土坑出土遺物（第15・16図）

51号土坑からは灰釉陶器碗、須恵器碗、酸化焰焼成の須恵器坏・皿・土師器甕^{註6}が、52号土坑からは酸化焰焼成の須恵器坏が出土している。中でも須恵器碗・坏に関しては、底部調整の有無及び口径・器高・底径などの法量変化によって時間軸の新旧が捉えられている。ここでは51・52号土坑出土の須恵器碗、酸化焰焼成の須恵器坏にみられる諸特徴を列記したい。

- ① 底部を観察してみると、須恵器碗、酸化焰焼成の須恵器坏はすべて回転糸切り痕を残している。
- ② 口縁部形態をみてみると、51号土坑のものはすべて丸味をもち、口唇部は僅かに外反する。これに比べ、52号土坑のものは口縁部に丸味をもたず、底部から口縁部が直線的に開いている。
- ③ 口径と底径の法量比は、すべて口径>底径×2を示している。

以上の特徴からみて、51号土坑のものは新開遺跡Pb区、52号土坑のものは栗谷ツ遺跡1号窯出土の土器に類似するものである。^{註7}

〔註〕

- (1) 1・2は小川貴司・比田井克仁氏（『古墳時代土器の研究』1984）によれば、東京都の6世紀代の土器を4段階に区分した3段階め「。坏Eの口縁部が外反するようになり、器高が低くなるとともに、坏類の口径が全体的に大きくなる段階」の特徴を備えているが、本例では4・5・7が共伴している点に注目される。
- (2) 後張VIb期は6世紀前半に比定される。
- (3) 口縁部途中に1条の稜を有する土器として、市内ではその他に本遺跡35H-1、49H-4、中道遺跡5H-7があげられ、すべて黒彩土器である。今後、細分される可能性が十分ある。
- (4) 但し、内面口唇部に鋭い面取りがみられず、丸味をおびる点で若干異なる。
- (5) 7・8は形態上の相異はあるものの色調・胎土・調整・内面底部に放射状の暗文が施されるなど細部にわたり類似点が多く、同一工人により製作されたものと推測される。そして、7が須恵器でいう坏蓋、8が坏身の形態を有し、両者は蓋と身の1セットであると考えられたが、僅かに7の口径が小さく、うまく組み合わなかった。従来、鬼高式期のメルクマルとされる有段坏は「模倣坏」と呼ばれるように須恵器坏蓋を忠実に模倣したものと理解されている。しかし、8の出土により坏身から坏身への模倣が明確になり、少なくとも坏蓋から坏身へという二次的転用を介さずに坏身から坏身へ、あるいは坏蓋から坏蓋へと一元的な流れが存在しそうである。可能性として、須恵器坏蓋模倣の土師器坏身といわれるものも初期においては、そのまま坏蓋として製作され、使用されたものとする方がむしろ自然であるように思える。
- (6) 本例は煮沸機能の土器とは考えられず、故に口縁部から底部にかけてみられる黒斑は焼成時に付された可能性が強い。つまり、本例はロクロ水挽きの土器でありながら、窯で焼かれたのではなく、直接土器に炎が触れるような焼き方（土坑状焼成遺構か？）で焼かれた土器であり、他の土器のあり方とは異例であることが注意される。
- (7) 松本富雄氏に御教授を願った。氏によると、新開段階の坏は口縁部が丸味をもち、ロクロ水挽きがしっかり施されていることがわかるが、栗谷ツ段階では口縁部に丸味をもたず、概して粗雑・簡略化にあり、さらに栗谷ツ段階の坏は新開段階のものに比べ、底径が小さく、器高が低くなる傾向があると言う。又、51号土坑出土の灰釉陶器（1・2）の内面底部を観察され、転用硯の可能性のあることを指摘していただいた。

第3章 中野遺跡第6a・6b地点の調査

第1節 遺跡の概要

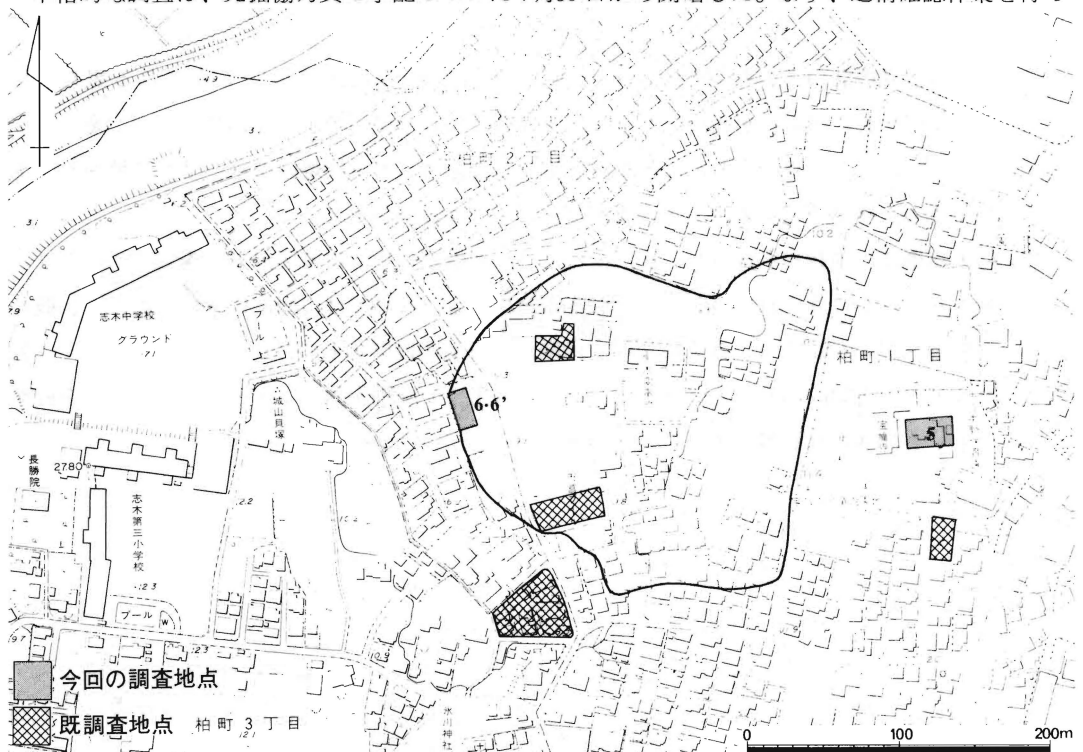
(1) 立地と環境

中野遺跡は、柳瀬川を北西に臨む台地上にある。遺跡の南西には柳瀬川に直交するように狭い谷が入り込み、遺跡のある部分は舌状台地状となる。遺跡の標高は9~11mで、低地との比高差約3mを測る。遺跡内は宅地化が進んできているが、畑地を多く残している。中野遺跡では過去の調査で、弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の住居跡が発見されていて、該期の集落跡であることが判明している（佐々木・尾形 1985）。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和62年7月23日から開始した。第6a地点・第6b地点は隣合って位置していたため同時に調査することにした。調査区は西半（A列）が水田の埋め立て地であったためここを土置き場とし、B列の表土をバックホーで移動した。しかし、B列も土の入れ替えが行われていて、大部分が破壊されている状態であった。

本格的な調査は、発掘協力員の手配のついた7月30日から開始した。まず、遺構確認作業を行っ



第17図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

たが、調査区の北側に土坑1基・溝跡1条・ピット1本が検出されたのみであった。各遺構の調査は、土坑を切っている溝跡から始めたが、いずれの遺構からも遺物の出土量は極めて少なく、時期など不明な点が多かった。

8月1日には遺構の写真撮影・実測を行い、6日には重機により埋戻しを行い調査を終了した。

第2節 検出された遺構と遺物

1号土坑（第19図）

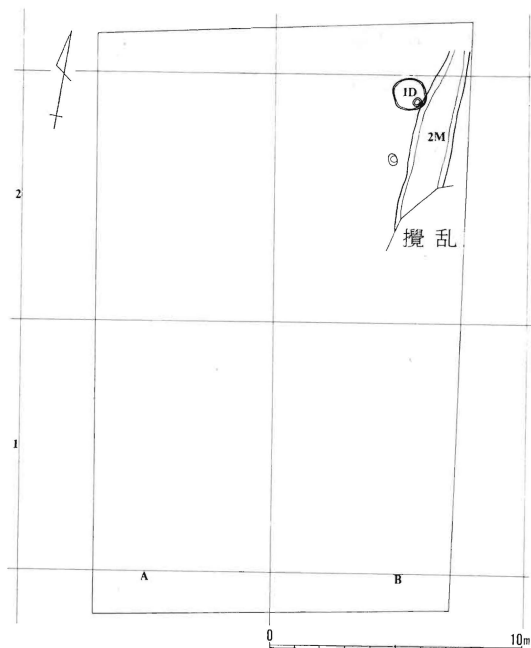
〔構造〕2号溝跡に切られる。（形状）平面形は大略円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦で、タライ状を呈する。東壁下の坑底にはピットが1本検出された。（規模）127×130cm、深さ20～40cmを測る。（覆土）ローム粒子を多量に含み、炭化物・焼土粒子を含む暗茶褐色土の単一土層である。

〔遺物〕縄文土器の小片1点と、軽石製品が1点出土した。

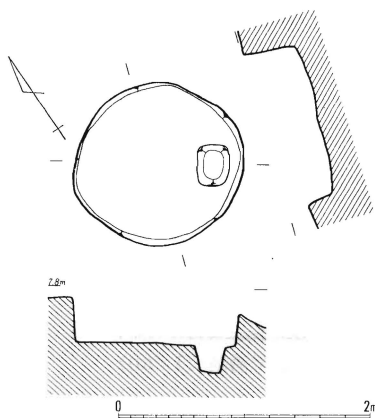
〔時期〕覆土の状態などから縄文時代の遺構の可能性はある。

1号土坑出土遺物（第21図1）

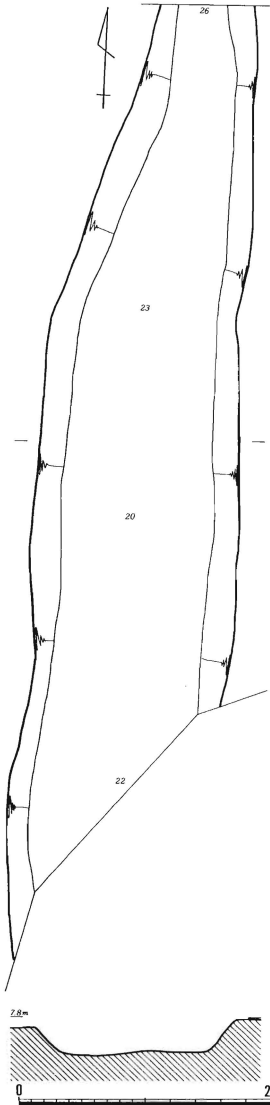
軽石製品である。ほぼ角棒状を呈し、側辺には研磨されたと思われる平坦面を部分的に観察できる。重量は23.2g。



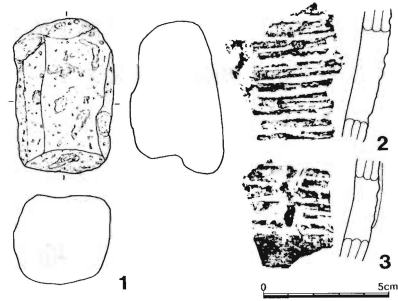
第18図 遺構分布図（1/300）



第19図 1号土坑（1/60）



第20図 2号溝跡 (1/60)



第21図 1号土坑・2号溝跡出土遺物 (1/3)

2号溝跡 (第20図)

〔構造〕 1号土坑を切る。南側は攪乱により破壊され、北側は調査区外に伸びる。(形状・規模) ほぼ南北に走向し、幅75～165cm、深さ20～26cmを測る。溝底はほぼ平坦で、壁は50°前後の角度をもって立ち上がる。(覆土) ロームブロックを含む暗褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。縄文土器が多いが流れ込みと思われる。

〔時期〕 不明。覆土の状態などから中世以降の可能性が強い。

2号溝跡出土遺物 (第21図2・3)

2・3は同一個体の土器。横位の沈線を多段に巡らせ、蛇行する隆帯を垂下させる。

第4章 中道遺跡第6地点の調査

第1節 遺跡の概要

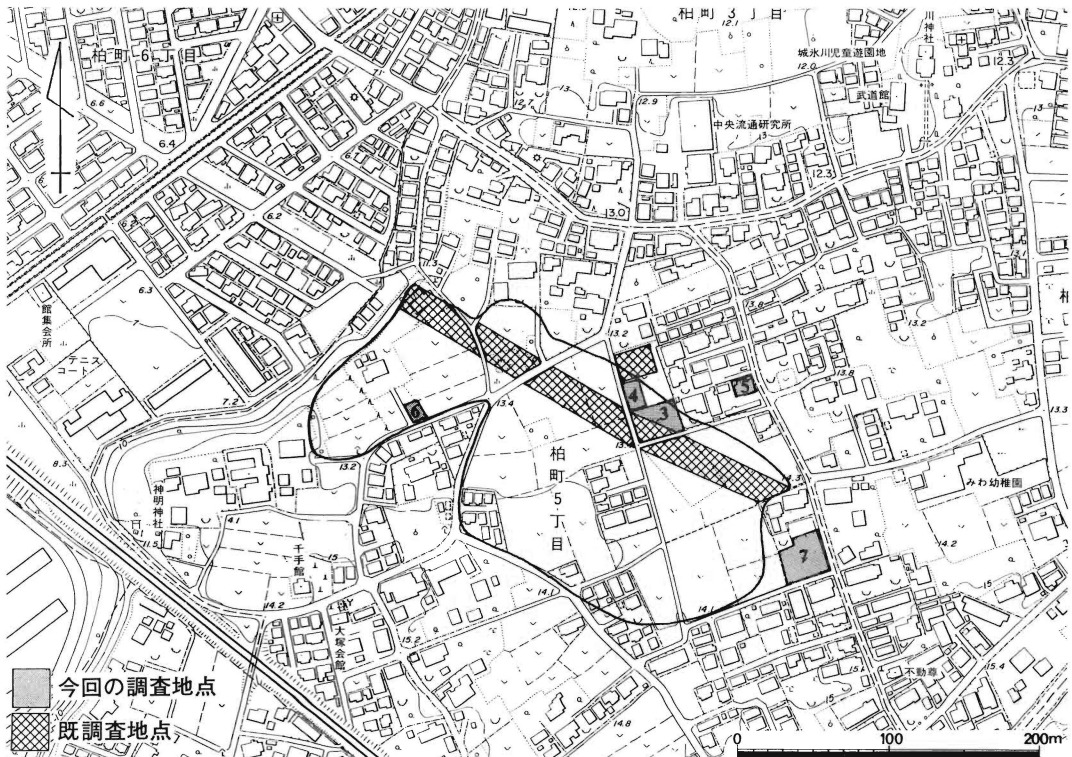
(1) 立地と環境

中道遺跡は、北西に柳瀬川を臨む台地上にある。標高は北端で約13m、南端で約14mを測り、目立ちはしないが南へ行くにつれて徐々に標高は高くなっている。これは志木市が古多摩川の扇状地として形成された武蔵野台地の東端に位置するため、東京都青梅市付近を扇頂に志木市は最も低い所に位置する。遺跡の現況はまだ畑地を多く残しているが、宅地化が進んでおり、さらに昭和62年着工の都市計画道路富士見・大原線建設に伴ない、今後の都市化はまぬがれない。

本遺跡は先の都市計画道路建設に伴う発掘調査により、旧石器時代の石器集中分布地点、縄文時代中期、古墳時代後期の住居跡などが検出されている（佐々木・尾形 1988）。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和62年9月18日から開始した。バックホーを使用し、ほぼ南北に1m幅のトレンチを3本あけ遺構確認作業を行った結果、調査区北東隅から土坑と思われる黒い落ち込みと北西



第22図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

隅からピットが検出された。そのため、21日からは遺構の精査にとりかかったが、遺物の出土量は極めて少なかった。

9月28日には遺構の写真撮影・実測を行い、29日には重機により埋戻しを完了、調査を終了した。

第2節 検出された遺構と遺物

24号土坑（第24図）

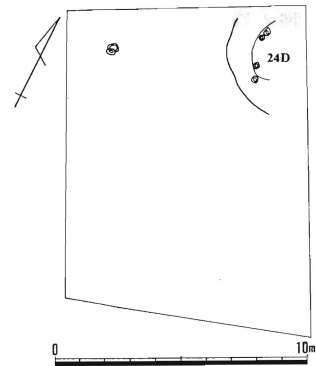
〔構造〕北側の大部分が調査区外にある。（平面形）円形と思われる。（深さ）104cm。（覆土）1層－表土。2層－ローム粒子・ローム小ブロック・小石を多く含む暗褐色土。3層－ロームブロック。4層－ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む明褐色土。5層－ローム粒子を多く、ローム小ブロックを含む明茶褐色土。6層－ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。7層－ローム粒子を含む暗茶褐色土。8層－ローム粒子を含む黒褐色土。9層－ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。10層－ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。

〔遺物〕覆土中から陶器小破片が3点出土したのみである。

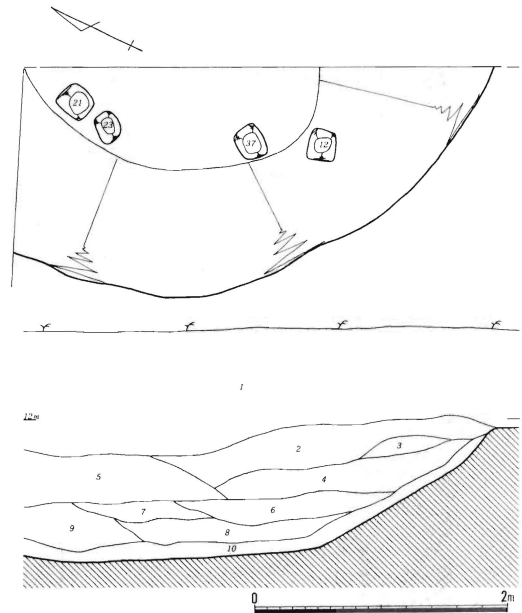
〔所見〕調査当初は平面形・規模等から開口部が挿鉢状を呈する井戸跡とされていたが、深さ104cmで坑底らしい面が確認されたため一応土坑として取り扱うことにした。今後、北側の調査が可能であれば改めて触れることにしたい。

24号土坑出土遺物（図版11-1～3）

1・3は瀬戸・美濃系皿で、釉薬は全面に長石釉が施されている。1は器高2cm・推定口径11.4cmを測る。外面体部に稜を有し、全体に厚めの器壁である。高台は削り出しによるもので、断面は低い台形を呈する。2は瀬戸・美濃系の挿鉢の口縁部破片である。



第23図 遺構分布図（1/300）



第24図 24号土坑（1/60）

第5章 西原大塚遺跡第6地点の調査

第1節 遺跡の概要

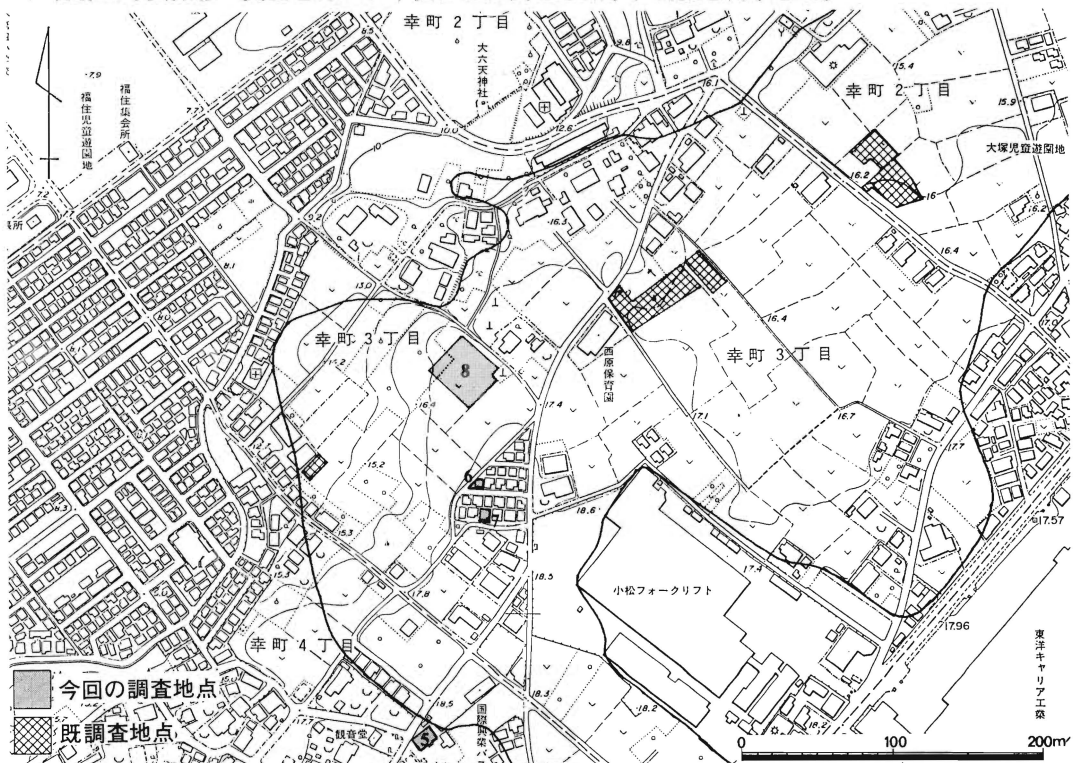
(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、東武東上線志木駅の西方900mの地点に位置し、面積約165,000㎡に及ぶ市域最大の集落跡で、旧石器時代、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、平安時代の複合遺跡である。

遺跡は、北東流する柳瀬川に開析された低地を北西に見下ろす台地上にあり、標高は台地上で14～18m、低地で8m前後を測る。遺跡内は大部分が畑地であるが、この地域に区画整理事業が計画されているため、将来、開発行為の増大が予想される。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和62年11月8日から開始した。バックホーを使用し、表土を剥ぎながら遺構確認作業を行ったが、調査区南側に方形の落ち込みを確認、この部分を拡張した。19日からは遺構の調査を開始、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけての小型の住居跡であることが判明した。20日には住居跡の写真撮影・実測を行い、午後には埋戻しも完了、調査を終了した。

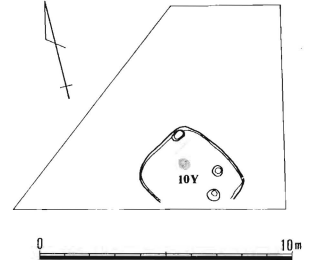


第25図 周辺の地形と調査地点 (1 / 5000)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

10号住居跡（第27図）

〔住居構造〕住居南コーナー部分は調査区外にある。（平面形）隅丸長方形。（規模）3.15×3.35m。（壁高）20～30cmを測り、急斜に立ち上がる。（床面）住居南側から東側にかけてがよく踏み固められていた。（炉）住居中央より北に偏ってある。60×60cmの地床炉で、深さ5cm前後を測る。（柱穴）3本検出されたが不規則な配置である。（覆土）ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗褐色土を基調とする。特に床面近くに焼土・炭化物が多く検出された。



第26図 遺構分布図（1/300）

〔遺物〕あまり多くないが、炉の上に台付甕形土器が横たわった状態で出土した。

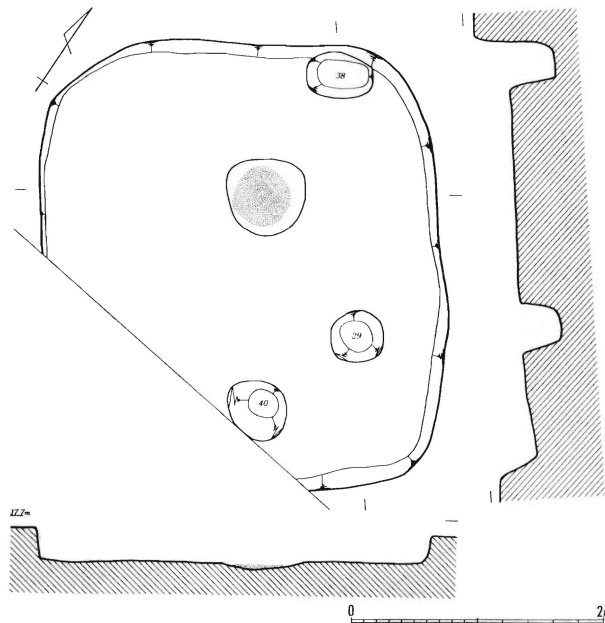
〔時期〕弥生時代末葉～古墳時代初頭。

10号住居跡出土遺物（第28・29図）

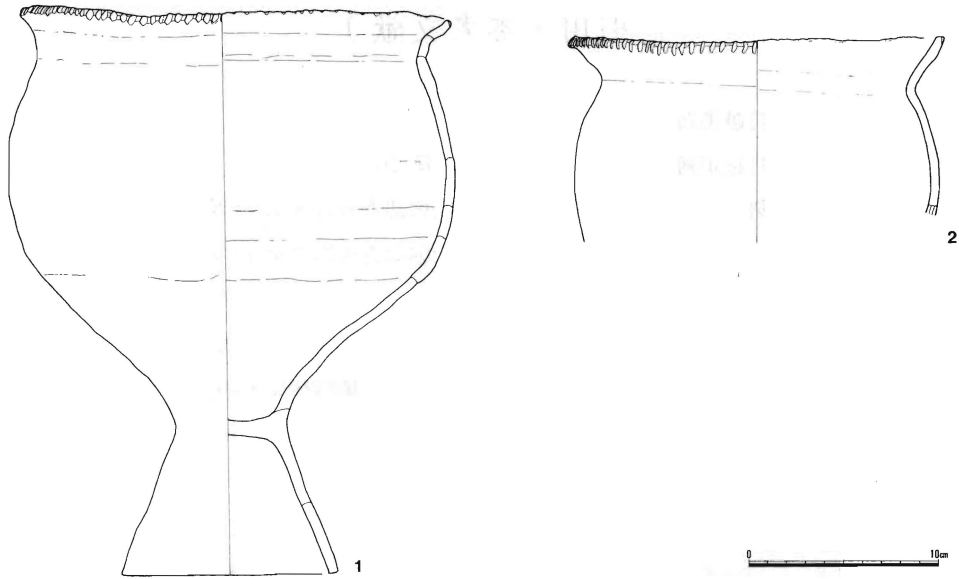
甕形土器（1・2・5～7）

1は台付甕形土器。最大径を胴部中位にもち、頸部は直線的に僅かに開き、口縁部は外反する。口唇端部には刻みが加えられる。脚台部は直線的に開く。内外面ともヘラナデされる。ほぼ完形で、炉跡上に横転していた。

2は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口唇端部には刻みが加えられる。内外面ともヘラナデされる。胴部中位以下を欠損する。住居南側の床面上の出土。



第27図 10号住居跡（1/60）



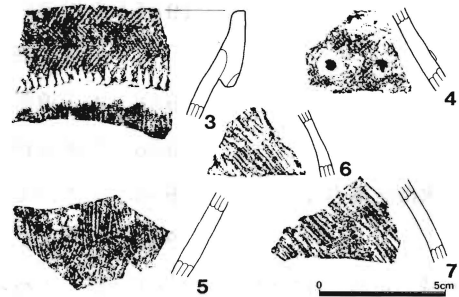
第28図 10号住居跡出土遺物1(1/4)

5～7は外面にハケ目痕を残す。

壺形土器(3・4)

3は複合口縁の土器。口縁部には単節の斜縄文が3段羽状に施され、下端にはハケ状工具の押捺による刻みが加えられる。頸部外面はヘラ磨きされるがハケ目痕を残す。内面はヘラ磨きされる。

4は肩部の破片。単節の斜縄文が施され、円形浮文が付けられる。内面はナデられる。



第29図 10号住居跡出土遺物2(1/3)

〔引用・参考文献〕

- 会田 明 1978『打越遺跡』富士見市文化財報告第14集
1983『打越遺跡』富士見市文化財報告第26集
- 井上 肇他 1978『舞台(資料編)』埼玉県遺跡発掘調査報告書第17集
1979『舞台(本文編)』埼玉県遺跡発掘調査報告書第18集
- 上田 真 1987『土器編年の年代幅と集落研究について－相模地域の奈良・平安時代集落遺跡
出土土器から－』東京大学文学部「考古学研究室研究紀要」第6号
- 小川貴司・比田井克仁他 1984『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
- 神奈川考古同人会 1978『シンポジウム 神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器編
年試案』神奈川考古第5号
- 佐々木保俊 1984『針ヶ谷遺跡群』富士見市遺跡調査会調査報告第23集
1987『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集
- 佐々木保俊・尾形則敏 1985『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木
市遺跡調査会調査報告第1集
1987『新邸遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木
市遺跡調査会調査報告第3集
1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集
1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第5集
- 志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』
1986『志木市史 中世資料編』
- 下城 正他 1988『三ツ寺I遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 立石盛詞他 1983『後張 本文編・図版編』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 谷井 彪・宮野和明他 1975『西原大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集
- 玉口時雄・小金井靖 1984『土師器・須恵器の知識』考古学シリーズ[7] 東京美術
- 沼山源喜治・中山清隆 1985『大瀬戸東遺跡』朝霞市文化財調査報告書第13集
- 長谷川厚他 1986『鉞切遺跡』横須賀市文化財調査報告書第12集
- 松本富雄 1981『新開I』三芳町埋蔵文化財報告11

版 圖



調査区近景



発掘風景



縄文時代 1号埋甕



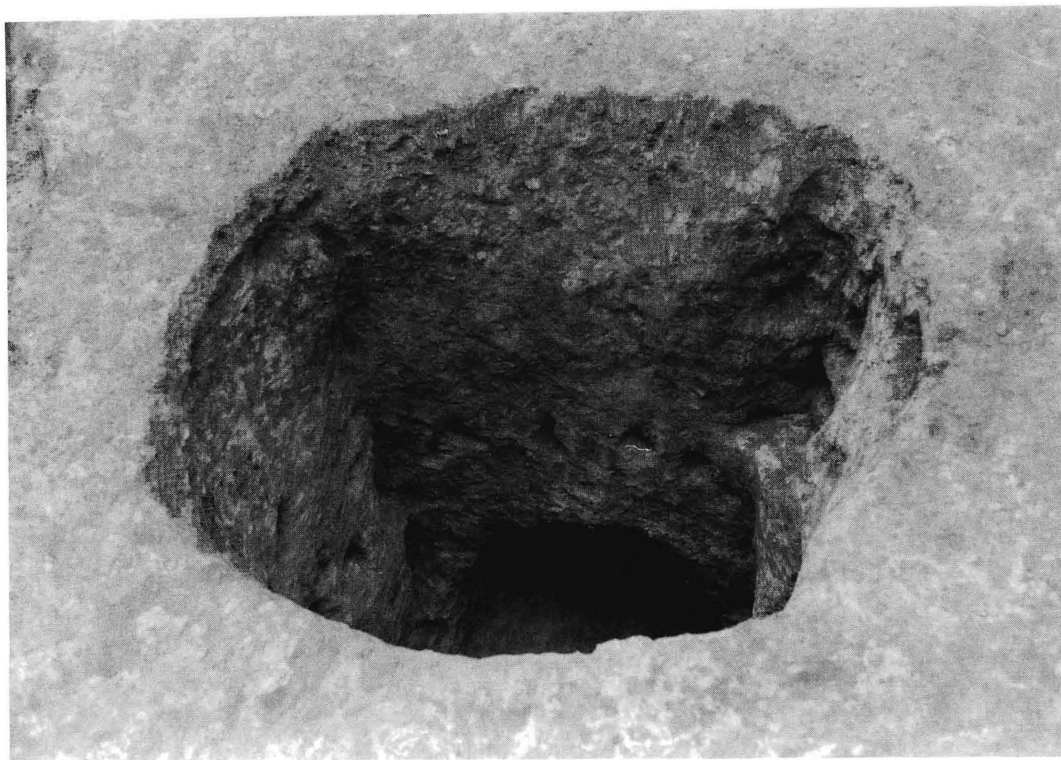
弥生時代 2号住居跡



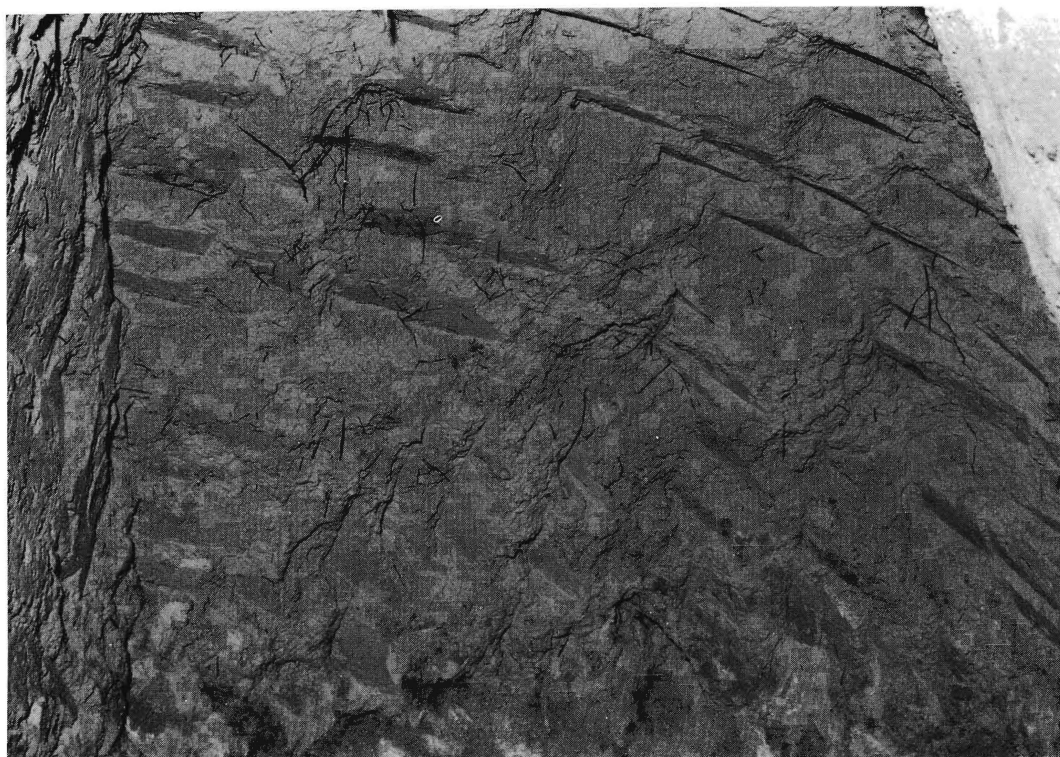
古墳時代65号住居跡



65号住居跡遺物出土状態



49号土坑



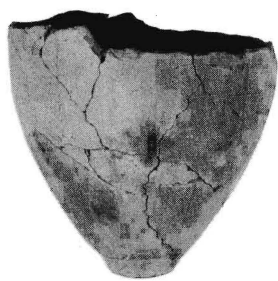
49号土坑主体部の工具痕



51 号 土 坑



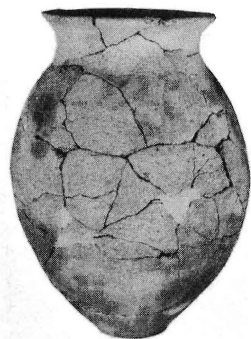
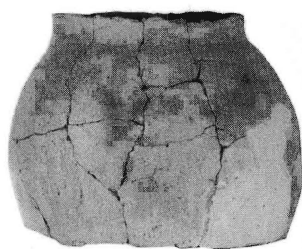
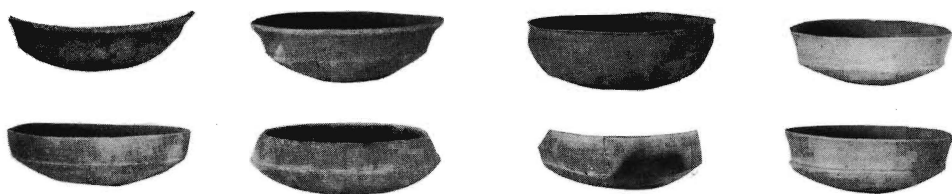
52 号 土 坑



縄文時代1号埋甕埋設土器



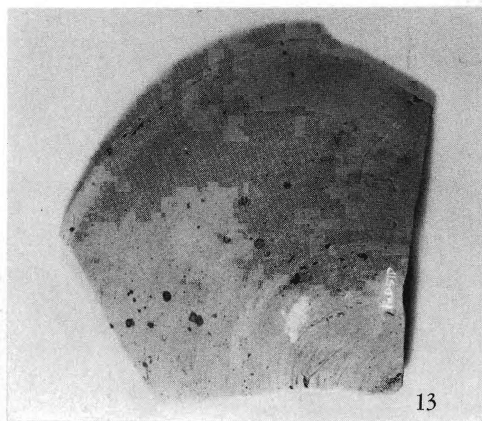
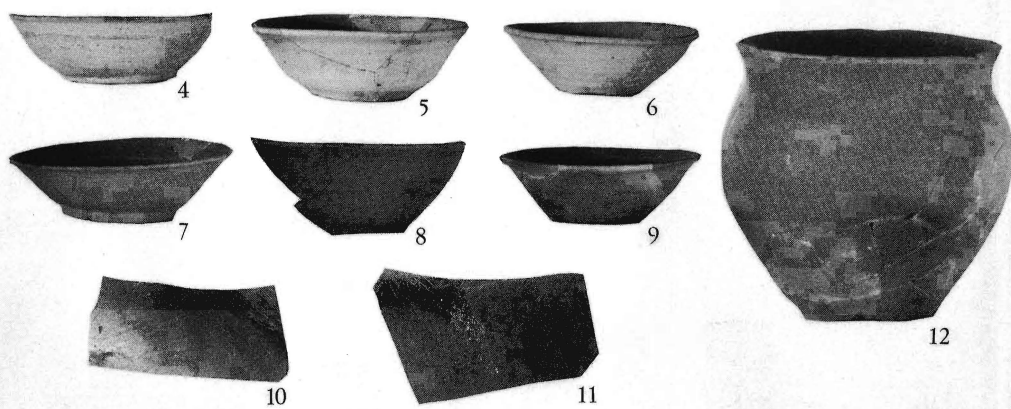
弥生時代1号住居跡出土遺物



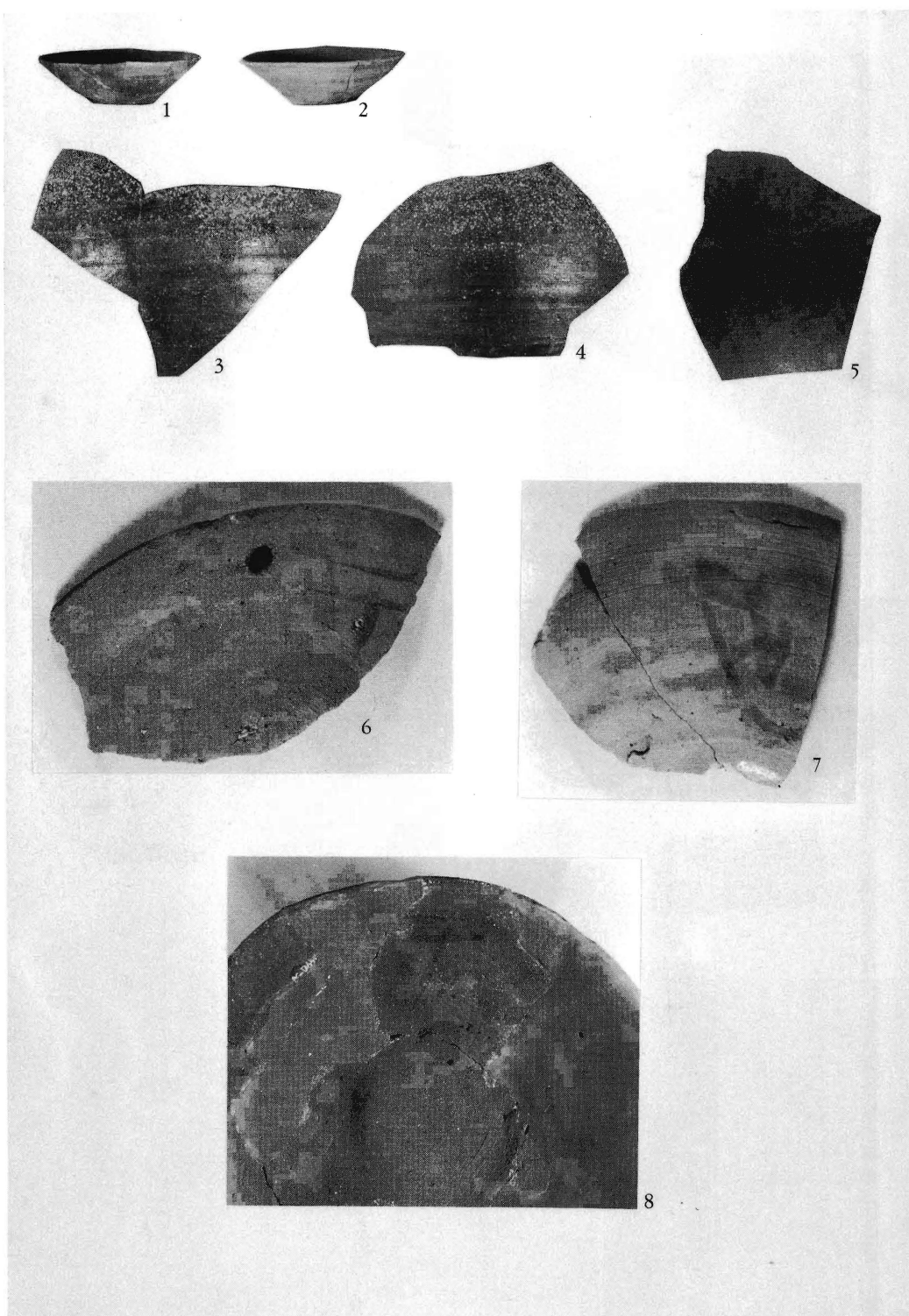
古墳時代65号住居跡出土遺物



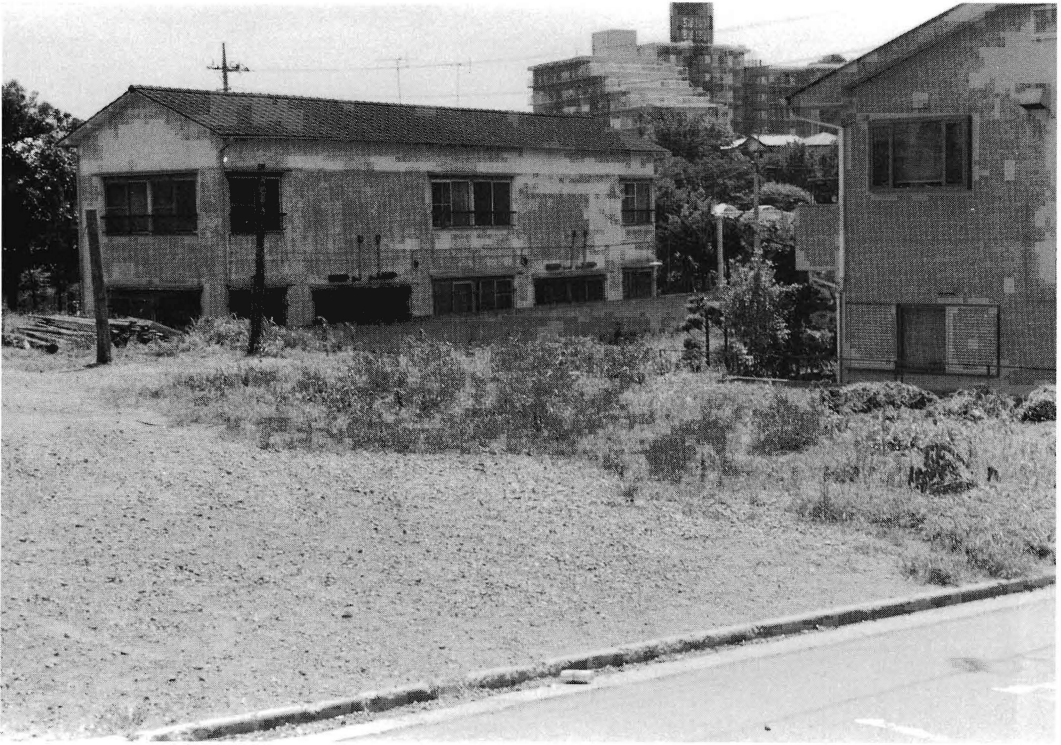
49号土坑出土遺物



51号土坑出土遺物



52号土坑出土遺物



調査区近景



発掘風景



2号溝跡



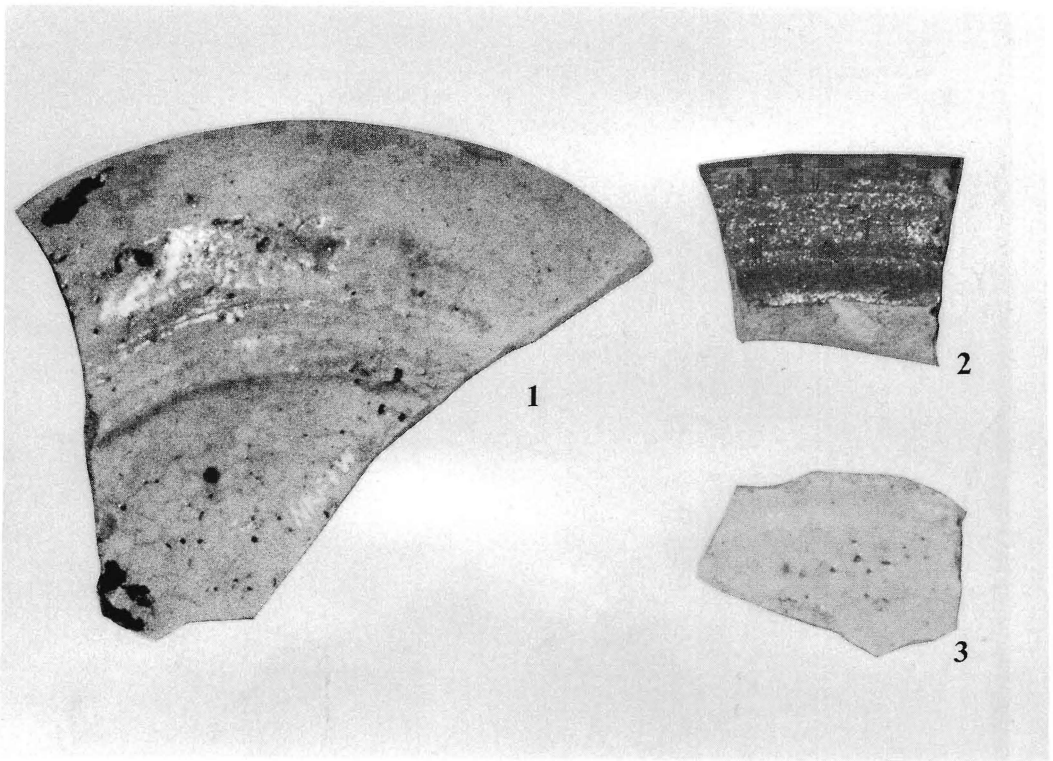
1号土坑出土遺物



2号溝跡出土遺物



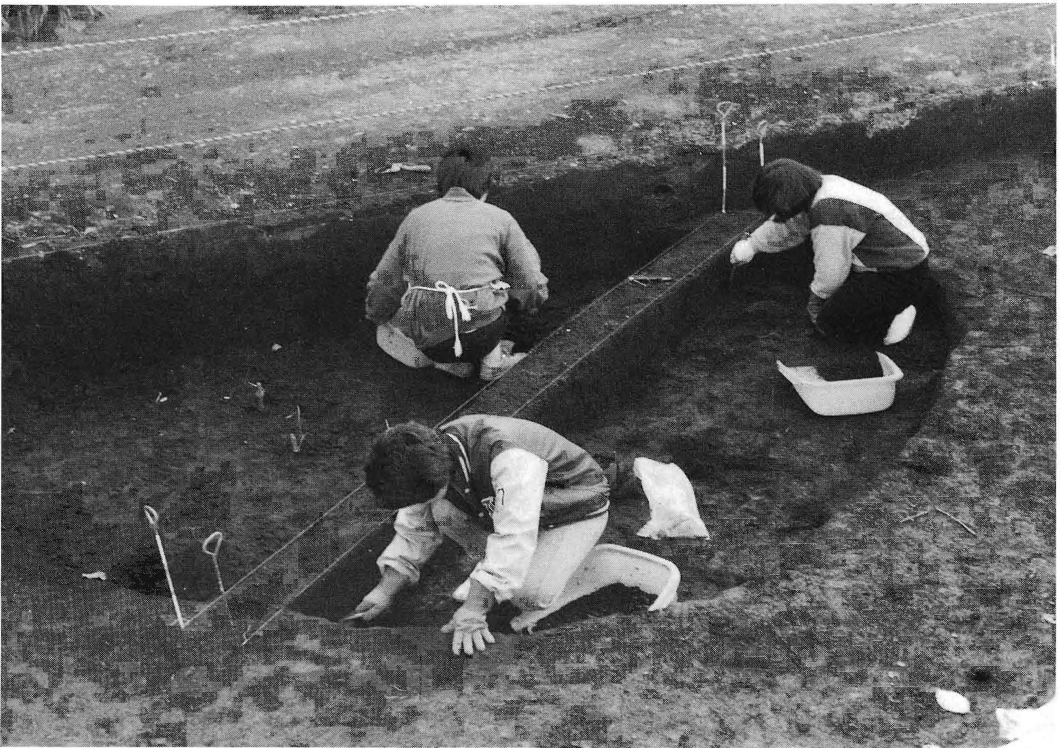
24号土坑



24号土坑出土遺物



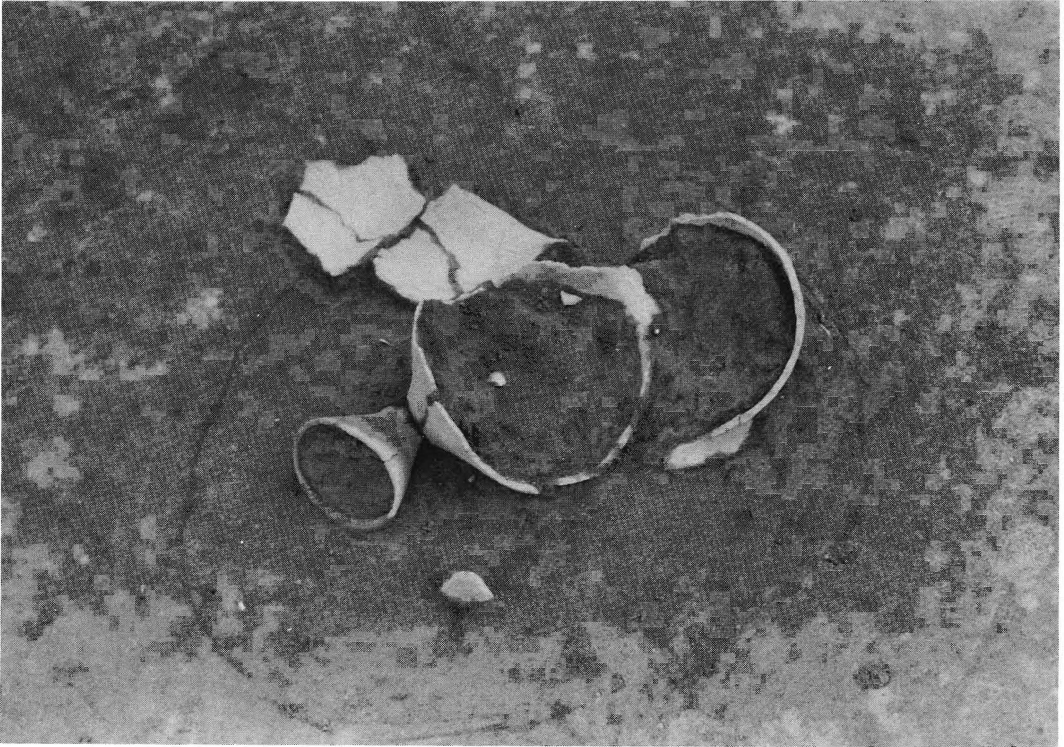
調査区近景



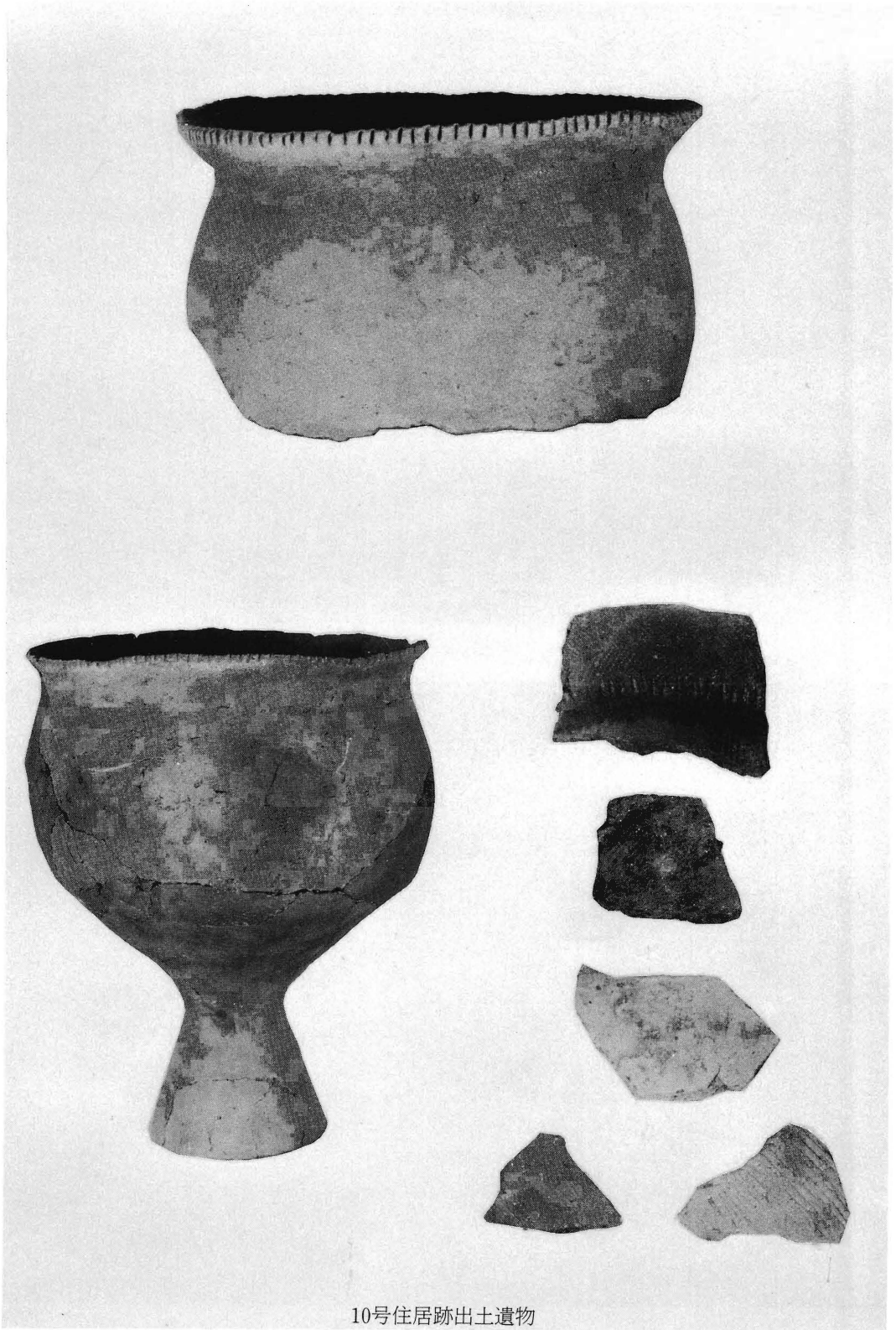
発掘風景



10号住居跡



10号住居跡遺物出土状態



10号住居跡出土遺物

志木市の文化財 第13集

志木市遺跡群 I

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成元年1月31日

印刷 望月印刷株式会社

